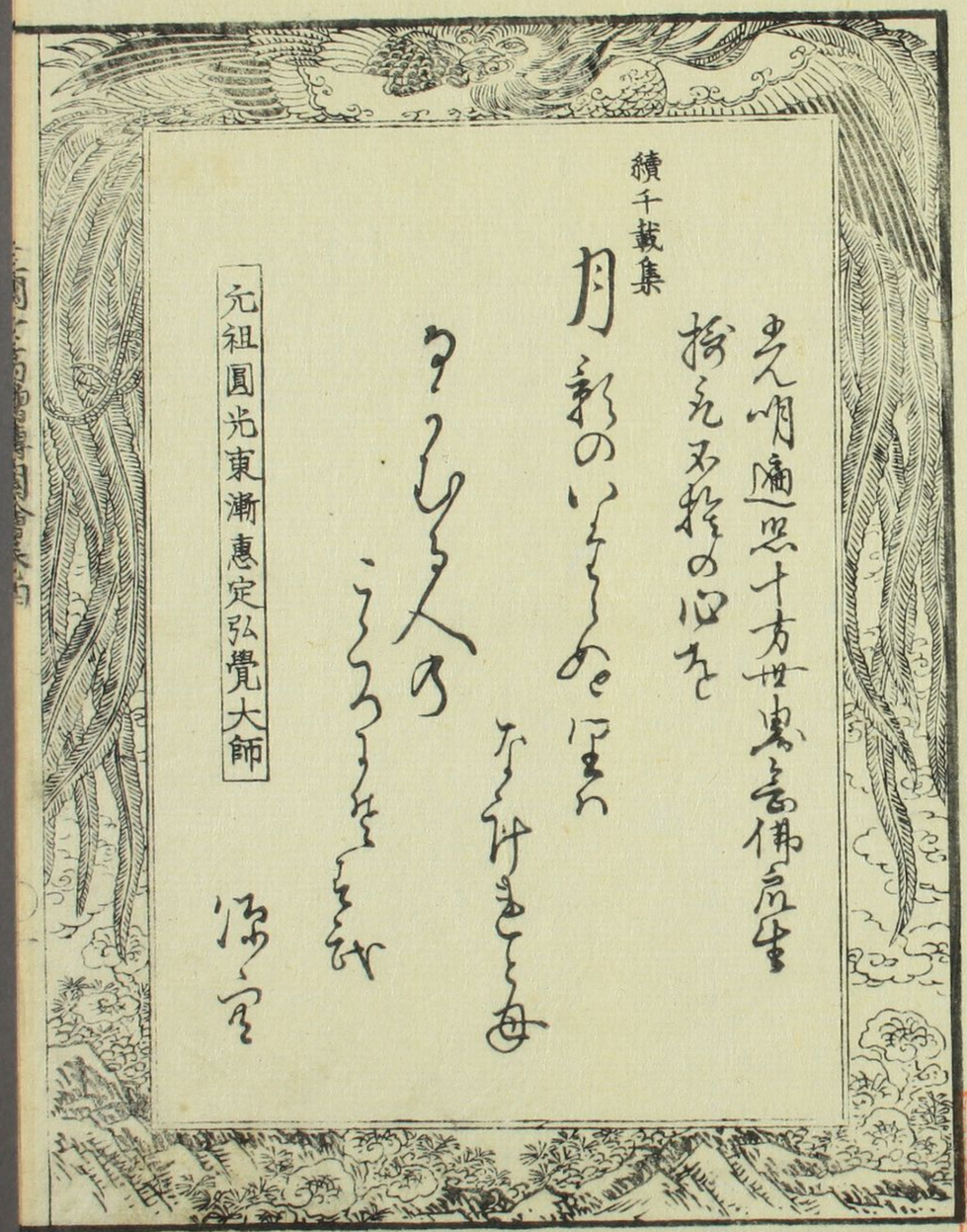
三國七言俚語圖會

本編之巻

四


續千載集
元祖圓光東漸惠定弘覺大師

三國七高僧傳圖會本朝之卷目録

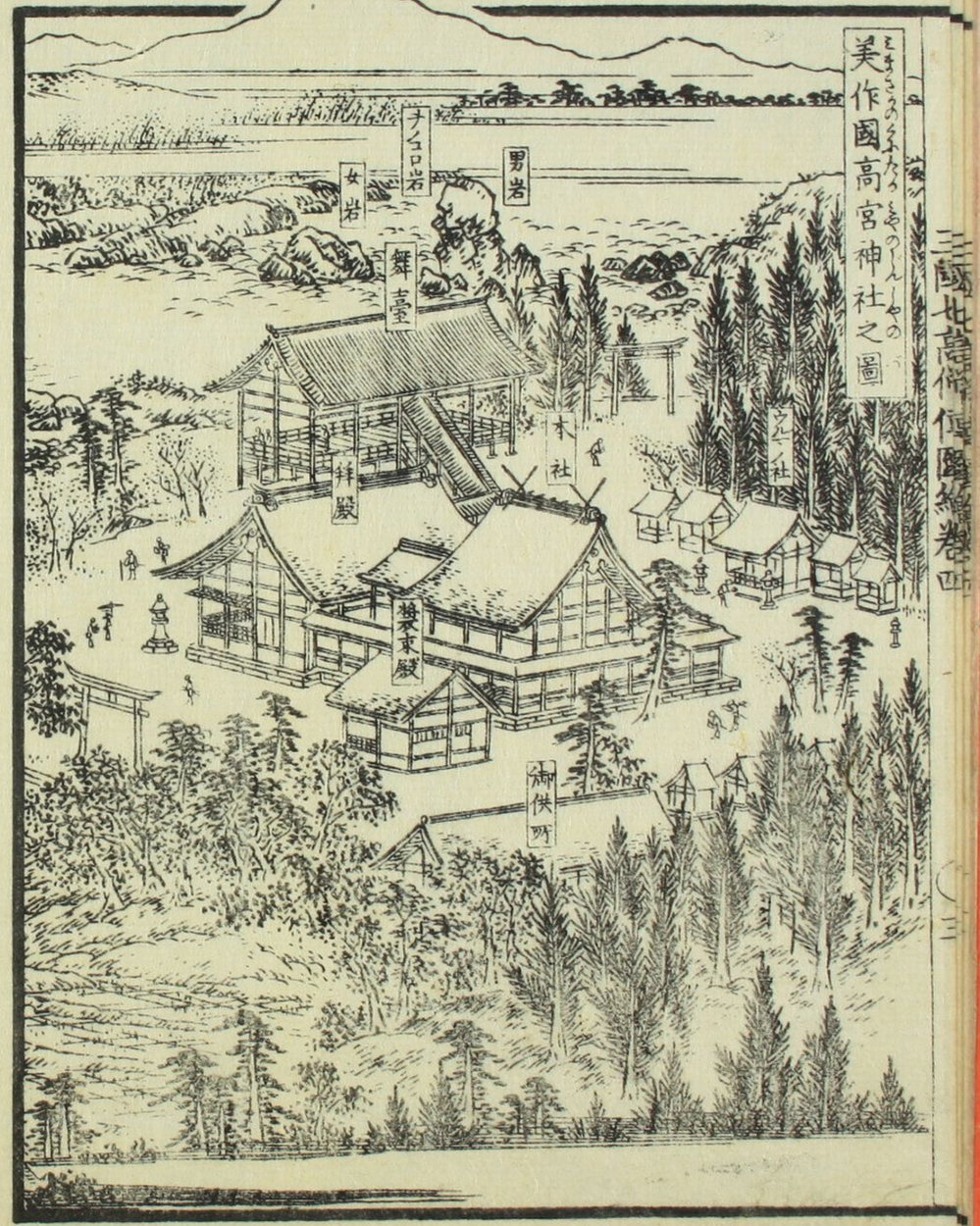
源空上人傳

第一　深間時國祈觀音設一子並先祖家系
第二　勢至丸匿竹間暗射讐
第三　勢至丸登菩提寺學佛經
第四　阿闍梨源光試奇童
第五　勢至丸祝髮受大乘戒
第六　圓明就叡空諱更源空
第七　源空闡揚浄土丕弘眞宗
第八　東大寺大佛再建重源任大勸進職
第九　於上西門院説戒並小蛇生天上
第十　遠州櫻池来由
第十一　於大原勝林院源空論諸宗碩師
第十二　重衡請源空授戒並於南都被誅
第十三　維盛粉川寺謁源空並奉法華經受戒
第十四　東大寺供養並學匠功德議論
第十五　明遍僧都夢想並蓮臺野髑髏供養
第十六　於女院説戒並兎免畜業生天上
第十七　耳四郎悔先非歸佛門
第十八　於仙洞諸宗碩德談聖道浄土二門

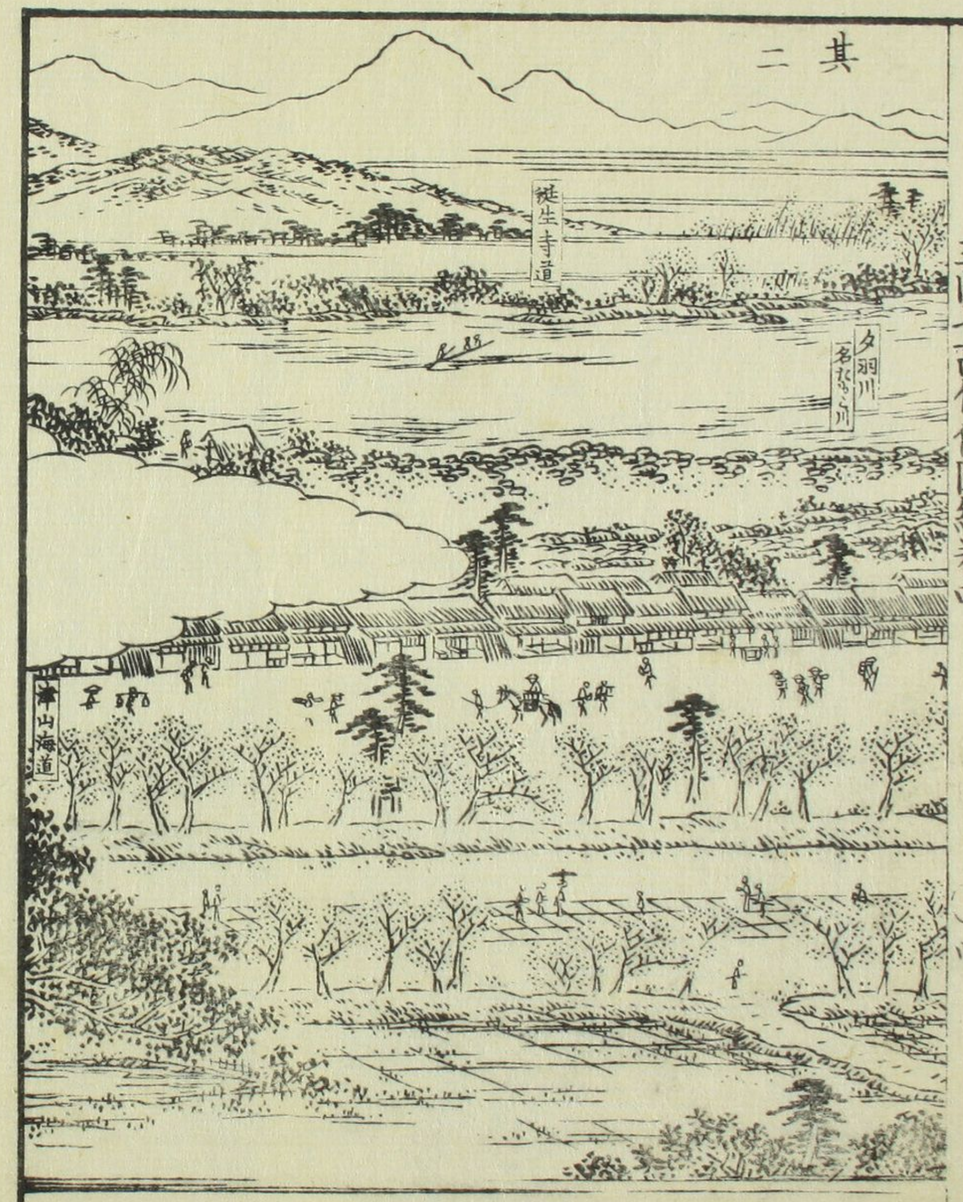
第十九　顕眞法印迁化並靈山寺不断念佛奇異
第二十　後白河法皇崩御
第廿一　源空在靈山修不断念佛並異光照堂内
第廿二　東大寺大佛供粮并俊乘坊重源之傳
第廿三　津戸爲守問有智無智教化差別
第廿四　源空於月輪殿談義并熊谷真實之傳
第廿五　因月輪殿請源空箸選擇集并庵室房籠
第廿六　三井僧正公瀧破迁擇並燒淨土決疑抄
第廿七　桓舜僧都闍聖道歸淨土法門
第廿八　明恵著摧邪輪破選擇
第廿九　雲朗僧正詰選擇並山門蜂起
第三十　南都北嶺再嗷訴並源空處流刑
第卅一　山王猿春日鹿怪異并源空勅免
第卅二　源空於大谷入滅並勢觀房曰縁
第卅三　波畫堅者破選擇並台徒壞廟堂
第卅四　栗生之丘荼毗尊骸並勅賜尊號

目録畢

岩戸山
随身門


美作國高宮神社之圖
ナイコロ岩
女岩
男岩
舞臺
拜殿
本社
末社
樊束殿
御供所

其二



万葉
まそかがみ
うなてのもり
社の
苔むす松と
象ふるき
つま
きみん
まもと
ん

古今
義仲のくらの
皿山
さらやま

我名は
もそし
万代
まもわ

押領使左衛門尉漆間時國

人皇五十四代仁明天皇之御宇西三條右大臣
源光公六世孫式部太郎源年於作州娶漆間元國之女
生男子元國無子使外孫盛行嗣家時改源氏号漆間盛行
其三代孫時國云

時國之一子勢至丸

父漆間時國母桑氏
十五之時剃髮受戒
号圓明十八而
改名為法然房
源空
四十三而
弘淨土
專念之宗
念佛往生
眞門之
元祖也

○續日本紀云。元明天皇和銅六年。割備前六郡始置美作國云云

拾芥抄云。用野。苫南。苫北。吉野加四郡爲十一郡云云 今無用野郡

英多。吉野。勝田南。勝田北。粂南。粂北。苫東。苫西。大庭。眞嶋。

當國一宮中山神社 苫西郡にあり 祭神大己貴命 貞觀十七年四月 神階正三位

同二宮高野神社 同二宮村にあり 祭神鷦鷯菩不合尊 延喜式神名帳に出美作國十一座の一

摂社漆間神社 木社の傍にあり 祭神神官五石氏の祖神なり是則漆間の元國の先祖の天神と奉る所なり委ハ五石氏の事記に詳なり

源空上人の傳に云く神護大夫元國ハ當高野神社の大宮司なり或ハ神の太夫ハもなり西名もに大宮司のこと云五石氏ハ豐後国五石の住人なり後漆間と領とつて家名す

當社高野の神境ハ作陽最第一の勝地なり前に飛泉あり白浪あるも

馬の駈るが如く或ハ淵に臨りて音喧しく松林に響く。堰高く浪打ちゆる音喧しく松林に響く。

後ハ檜杉の大樹鬱茂して森々たり。神門ハ飛騨の匠の造ところ門守の立像ハ

頗る古作にして幾ばくとなく年を経たり。右大將頼朝卿の時梶原源太景季普請

奉行して當社を修補を後世尼子毛利赤松等の家なり再興有

古ハ社領八十石 ありしと聞ゆ 馬場條長くして左右に櫻の列樹あり。傍に雲梯杜の古跡あり

て千歳を経たる椋の大樹鬱茂して左右に蔓延して下枝に杖し。恰も生花の

如し根に石の玉垣を圍し碑石を建 森家の儒臣江村後羽の文なり 此地近世迄

大樹陰森として晝なほ冥々たり。是雲梯杜の古跡の證なり。

樹下に小池あり 万葉集に官の大鳥居の額ハ高野大明神の五字二行に書す 根と詠し 古址 大師在世の時社頭

弘法大師の筆なりと 弘法大師在世の時社頭 南方廣く久米の更山と云

右手に嵯峨山あり下に大堰あり。幾ど都の嵯峨に彷彿たり。河下に誕

生寺 源空上人誕生の田地 稲岡の庄 板社村にあり寺領五十石の伽藍

岩と雌雄の夫石あり。男の方ハ亀頭の如く陽根に似たり。女岩の方ハ少し

低く陰門に似て男岩に隨ふが如し。滿水のときハ折々隱れ見ゆ。

此淵に臨て天王皇と云る地あり。後鳥羽院此所より久米更山と

叡覽まして御製あり名所あり。又此河の水源ハ伯因の國界

高山より出るゝ下八十八里の間流れて備前國金岡出て海に入又馬場の鳥居前より十八丁東に古松左右の街に連なりて菅繩手と号津山の城下の入口なり。社頭の西二十一計に院の庄と云へる地あり。元弘の乱に後醍醐天皇隱岐國に迂幸の時。行宮の古跡にて。所謂備後三郎高德志と官軍に通じ此行宮に潛び入。庭上の櫻樹の皮を斫て。二聯の句を書て云く。君莫忘勾踐。時非無范蠡と。而して其志を顯ゝ云。其古木枯朽て後世尚栽つぎて世々に栄へ。晩春の頃花爛熳なり。且傍に碑石を建。森家の儒臣江村俊軒の撰なり。○此等の條いとの卷に加へらるる説話なれども古を去のゞ癖なり。餘紙に記せて記添のゝ。看客疑惑まべからず

○本朝孝子傳云。貞觀年中美作國久米郡の人秦豊永。天性孝順。幼に して能親に つゝく親死るの後常に墳墓を守る。位三階に叙し課役を蠲き門閭に表す。衆庶に知られしと云。著ゞ源空上人の母秦氏の祖是なり

三國七高僧傳圖會本朝之卷本

杓杞菴一禪居士編輯

○源空上人傳

本傳曰。釋源空姓は漆間氏。美作國久米郡稲岡の庄の人なり。父は時國。母は秦氏。其子なるを以て共に佛神に祈る。母の夢に剃刀を呑と見て覺て姙しあり。是を夫に語る。夫の曰汝の姙ところ必男子にして後。帝の戒師となるべしと。母則ち心を佛乗に飯して。口に纏葷を断く。身を慎み長兼二年四月七日。午時に生る。其時天より二の幡降りて其奇瑞を呈す。頭圓にして授り。眼黄にして光あり。性世の児と異にして。小児の戯を喜ばず。起居挙動尋常なるに。動もすれば西の壁に向に辟あり

一説に云。元祖法然上人は美作國久米南条稲岡の庄（一書云稲岡の庄板社村の人也。）父は廳官左衛門尉漆間の時國。母は秦氏の人なり。抑時國の先祖と寺に

右大臣元光より六代の孫。式部大輔元俊陽明門一書ハ陽明院ト云ふ。して内藏人頭義高と殺害せ〻罪科ゆゑ美作の國へ配流せらる。爰ハ當國の廳官神護大夫漆間元國一人の女子を持。彼婿にして男子を設る重國と号し其子を親國と云。其嫡子ハ時國と号て外祖の家を継。彼時國の先祖ハ流人にて所帯なりと雖も財宝を〻かゞ眷屬室ハ満て繁昌を尽有とぞ。歳もとゞかハ三十ハ余て一人の子なし一時時國妻女ハ相語て曰。我一人の子なし一期つゝてのち後世を訪ものを〻。又其跡の絶ん事の悲〻さし云れば妻女自らも此とゝと歎き候。ちゝはいかゝん。遊君遊女とも相語ひて。君達を設けなまく自乳母にして育奉らんとて夫ハ然らとぞ。同くハ汝ら服ハ設ゝと二人の中ハ育ゝられと妻の云くさハ昔より今に至るまで。佛神ハ祈るとの叶ハぬとて物語ハも傳へらん。勝尾寺の勝如上人横河の惠心僧都。共ハ祈て設ける鍾愛の子ときけば。我その悲顔ハ漏

〻ふ涙ゝて夫婦心を一ゝて。同國菩提寺と云る山寺の救世觀音ハ詣て。一七日の祈願とぞ丹誠と抽んで祈ける程ハ。七日満ぬる夜の夢ハ貴僧忽然とかゝれ。太なる剃刀と妻女にあく。是と飲べし必子と設ゝと告ハ。ゝ危きゝ口と開さて。刀と呑と見て夢さめ〻。是ゝ〻て懐姙の身とすゝぶる妻女ハ時國ハ移ゝひて。新造の別室ハ引とり。日毎ハ沐浴し新ゝ衣と著し。身ハ香水とめゝ口ハ生息ゝの五辛の類ひと食ず。精進ハ身とゝ〻月盈て長承二年四月七日午剋。毎公ゝ〻ひ〻ゝ。安〻と男子と誕生ゝ〻。此ゝ後莞ハ大樹の椋の本あるゝ天ゝ白幡二流降下て此椋の梢ハかゝ紫雲たなびき館と覆ハ。鈴の音天中ハき白幡靡きて七日と經て白幡天ハ昇り紫雲漸ハ去ぬゝて。此椋の大樹星霜を經て風ハ傾き終ハ倒ゝとぞ。異香常ハ薫し奇瑞絶ゝ。人これを崇ゝて佛殿と建て誕生寺と号し。御影堂と造て念佛怠ることのなし。

勢至丸暗ふ
父の讐定明
を射る
定明

時国妻
勢至丸

昔応神天皇御誕生の時ハ八流の幡天より下る其故に八幡大菩薩と号す是本朝に八正道の弘まるべき表示也とぞ八正道とハ正見正思惟正語正業正命正精進正念正定なるなり又上人誕生の時しも二流の幡くだりしハ後年に仏教を難行道易行道と二つに分たまふべき前表ならんかと云々（正源明義抄の大意）

又一書に云く彼時国の先祖ハ仁明天皇の後胤西三條右大臣の末孫式部太郎源の年陽明門にて蔵人兼高を殺し其科によつて美作国に流され此に当国久米の押領使神戸大夫漆間の元国が娘と契りて男子を生せし元国男子なかりければ彼孫を以て子として家を嗣しむる時源の姓を改て漆間の盛行と号す盛行の子重俊重俊の子国弘其子時国なりと云（前の説に大同小異あり）

上人幼名を勢至丸と号す（或ハ三徳丸とも名づくと云）二歳になりたまふ秋七月十四日善導大師迁化の日に当つて南無三宝ととなへたまふそも襁褓の中より竹馬に鞭を挙るまで東に泣號たまふ恰成長の者の如くにして頗る性質聡明なりけれバ西の壁に向ひて黙然として居まします習あり天台大師の幼き時の行状に遠からず殊さら翠帳紅閨の中に貴まれ松風羅月の光に仰ぐ桃李万歳の春をむかへてハ萬花を折て膝の上に戯れ秋帳千年の窓のもとにハ明月を詠じて夜を明し給ふがごとし勢至丸七歳になりたまひ小弓の遊びをし給ふも常の稚児よりハ遥勝れ其外の遊戯悉く他に超たまへバ父母の鍾愛一かたならざりける此に当稲岡荘の預所に明石源内武者定明とて白河院の北面伯耆権守源長明が嫡男あり其身ハ堀河院の滝口の武者なり然るに漆間の時国ハ聊か先祖を慢ずるの心ありて定明に従ざりしかバ対面せざりけれバ定明深く之を恨み終に保元七年春三月十八日の夜定明五十人ばかりの士卒を従へ時国の館に討入ける折ふし余まるべき勇士ハ皆他に行て衛ものもなく以下の雑人ハ逃去て影だにも見えず時国ひとり起あひて小袖の端折太刀ぬきかざし敵と数刻に戦ひけり敵ハ八人此方ハ一人樊噲が猛勇と叫ひ難くぞ覚へける然れども王莽が術なさすく禄山が威を震戦ひけれバ前に

進み寄り三人と。忽ち斬伏たるうへ。此あるうへ避易し。そこ〳〵後ふ退きたる時国も
數ヶ所の疵を蒙りて。殆危く見えたりける。此比勢至丸は九歳なれども母諸
もふ管理の中ふ居きて。手馴し小方とりて。父の敵と狙ひは。其夜の大將る
武士と射るやどふ過ぎず眉間ふ中る。小事なれども痛手なりひ。其疵うして計策
の露れんてを恐れて。即時ふ此と引退く。是ふ依て從兵も共ふ後ひ引しべ。
勢至丸毋ふ對し敵ふ引めと賞へ。後父の安否と伺ひ奉らんと。内ふ蒐入尋ぬ。
豈科んや父は敵五六人と討ぶらて。敵の上ふ伏さるる。然れども事きれば。苦
き息の下ふ。今一回汝と見まうと思ふ心と命として。今まて存命ありつるを。涙
ふ詰るふど。勢至丸は涙ふくれるべ。今夜不意ふ討入し敵は見知て候
へば時国大きふ驚き。我ふ聚とやぶる敵を汝は何由へ。とうたるべと勢至丸こ
て曰誰ふ手と負せ候ふ。是ふ白河院の北面伯耆權守長明が子。明石の源内武者
定明ふて候と時国聞て。備へ黙頭かと。汝が行状ふ。是ふつけも今ふ世ふ

存命て有ば成長の後と見んものと。露の命の消うんと殘おやと涙とおべし。汝
ふ見るべ集り来る從類眷属。ともふ少徒と綾ふる。さる程ふ勢至丸は親の敵
討でやと勢い猛く出るとと。時国これとを汝は親の敵とおりて。定明等と
討とべ血て血と洗ふ理と。本の血は落るとと今の血又染べし。時國が定明ふ
ふ討もんと是過去の因縁なり。彼と親の敵とて討ば又汝が身ふ来んもを
一定なり。されば生死窮まるべ輪回なり。定明と討んと思ふ
ものあく有べうと諭しもへば。勢至丸只管ふ涙ふられてあるべる。此ふ時
国の舎弟ふ奈良本の金吾時貞とる有て。斯と聞よう馳来て此形勢ふ
歯ぎしべ。勢至丸ふ對ひて諫めて云や。此場ふ及ひ何うて敵と討であ
つるとと嘆きあるに面色ふ。勢至丸答て云く。多門天の吠尸羅城ハ對威王が
无盲城なりも。父の敵なりなと兼らべ。討ひべく候へども。父の制止の重
なれば力なく候て。又と涙ふ。時貞は左上りさるべ汝は未るべ

む。我は是より打立べし。二百余騎の兵士を相具し明石が館ふ押よせ門
とうと拳なりゝ然るふ何の音もうく南の庭より煙たちのぼり物おもゝ せぐ
見えしかば其辺のとのふ事のゝと尋れい明石どの公今夜頓死せさせおはして只今荼
毘せられ候とて皆々怒ふ声をあげて聞も時貞即時ふ内ふ入く見まゐらせば
棺の火と赤し廻りざうしうふ寄て薪とうのけ棺を破りて死人を見るに眉
間ふ射られし矢痕あり。偖は此一矢ふて明石は死せし者なりとて首をとり
て馳帰る。勢至丸ふ是とりてせば勢至丸これを父ふ見せて云く是ぞ先剋小弓
にて射たりし定明が首ふて候とのたまへば時国これを見ないて

後世をあるべきさまを教出の山人をこれふ先ぶたふりて
斯詠じたし又云く。汝は観音薩埵とうり申受る一子なれば必ずふ法師と成
て。仏教ふ帰し我々の菩提となれ。自ら後世とも求めよと遺言しつゝ西ふ
向ひ合掌して仏を念じ保延七年三月十九日四十三ふて朝の露と消ぬいり

妻室勢至丸が歎き譬へふ品もし。偖斯て有べきふ有ざれば菩提寺の学頭観
覚得業を招請し引導師として暮山の野辺ふ送る。東岱の煙とたちのぼりぬ
七日々々の念仏誦経怠りなく歎きの中ふ光陰うつり。一百日もたりぬるとぞ。
五輪塔婆とりたてゝ仏事斜ならぬ哀なる事ども也
一書云勢至丸小弓をとりて是を射るふ定明が目の間ふ立ふり。此痕隠
れて支頭るゝ。時国が一族怒を報ずんを必定なりと定明逐電してをぐ
当社ふ入て夫より勢至丸を小矢児と名け見聞の人々感せぬ人なしと
期て定明逐電の後隠居の心静ふて作り罪を悔後世の苦を悲み念仏
怠ずして往生の望を遂く。其子孫ふ上人の流れを受浄土の一行を旨とせり。
小児凡人ふあらずして。豈怨敵と恨むる心あんや定明痕を蒙ふ
跡とかくし往生とゝげ。子孫とまと浄土門ふ入ること是知識のたくみなるべし
凡夫敢とあやしまとあるべきとあれとも

勢至丸ハ父時國の遺言ヲ必ずと報をもふれ怨をもつて怨と報く。怨ゞこの時ふ
う息ん。唯ねゞくハ極楽ふ生ずることゝ祈りて以て自他の利益と圖るべしと有しふ
りて深く菩提心と發しぬひる。其年の冬ゝ彼菩提寺の院主観覚得業勢至丸
と弟子とせんと望まれる。素より父の遺言なれい。母子ともに固辞ちゝ得業ふ伴
ひて菩提寺ふ登りて學文を得業ゝらでゝ佛經と授ふ。一度聞ゞへハ則覚るのゝ
ゝ。能其義理と解し。一字教ゆるとハ十字と知る。一義と教るとハ多義ふ通じ。更ふ
忘ゝることなく學文の性ゆゑも流る水ゝも速なり凡九歳なりして十三歳なるゝ
菩提寺ふ住して習学なるふ和漢の文書ふ通ずるかゞ。諸の經論章疏ふ於てハ
通を得たるゞゝ。

一説ふ云く菩提寺の院主観覚得業ゝらハ原延暦寺の学徒なるゝ。大業の
望の達せざると恨ゝて。南都ふ移て法相と学して所存と遂く。勢至丸の母秦氏
ふ第なるれば上人の少男なるゝ。時国の遺言の事あるれば弟子ゝなれるゝとも

観覚得業ハ性く勢至丸の行状と鑑て。いまも凡人ふあらぬと覚しゝ徒ふ草
澤の塵ふ雑ん事と惜む。勢至丸ふ對て云く。汝ハあゝ学文の器量なり。田舍
ふしてハ其深理と究んと覚束ふし。されども明道ともあるべれば所
詮本山ふのぼりて学文あるべしと。勢至丸ゝなるべしと師の命ふ順て本山ふ
登りて勤学なるべ。得業ハ勢至丸と伴ひて里ふくだる。
母ゝふ告て暇をもひて本山ふのぼるんと。稍て母ゝの宿所ふいたり如此の條と
語られる。母のいく本山ハ何地ふあるや。得業云愚僧の本山ハ南都ふ侍
ゝ。聊據ゝる故あるとハ山門ハ他山なれども。知己の僧徒住ゝられハ。彼
方ふ登山せんと思ゝと母のいく。夫ハなるべ聞及ぶ比叡山ハ是ゝ
行程十日ばかり遠方のゝ。されハ我子と見まく思ゝも容易ハ叶まじ。又
使の者と遣ゝとも。往還も日數と經く。生死のほども期しがゝ。得業のゝ
ゆゝ程の支と学ぶせゝぐ何の不足ゝ有べき。愚いなるべざる事ゝ歎きゝ

菩提寺靈木銀杏之圖

圍四丈余 高三十間余 東西二十間余 南北二十七間余

あくうと山岳のごとし

菩提寺ハ美作国勝田郡高圓村ふあり岩間山と号ス或ハ奈岐山ともいふ隣國ふ雙ケ岳高山ふり本尊観世音立像丈八尺役小角の開基ふして鑑真和尚再興ス云々

源空上人幼稚の時私父観覚得業ふ従い勤学ス旧跡ふり世誕生寺の奥院と云

當寺ふ銀杏の木の大霊樹ふり傳ふ源空上人當山ふ勤学しゐ時銀杏の木を伐く櫨木としゐひしゐと師の房の是とつゐ出家なる身ハなとひ此木なりも生なるこのと根ふ切そんをるすこ敬ハゐひしゐの源空深く此事と恐とゐひ櫨木と元の庭上ふさゐて誓ていゐ我行ふ真の出家とゐるハ二さひ此木ふり枝ふ盛んとのひろ然ふ二さひ枝葉を生ず今ハ至りて本木ハ十四ノ人余り又枝ふりて本の如き痛さかりて其數百有余本ふり誠ふ大師の高德眼前ふて尊ゐ仰べ尊ゐ

得業もこれを推量するに是非の言もろ〳〵勢至丸ハ諫て云〳〵受がたき人身を受
逢がたき佛法の教うあひ。眼前の無常と見て。夢の中の栄華を厭こゝ。就中
父の遺言。耳の底ふ止て。心の中ふ忘ぬ。こゝ比叡山ふ登て速ふ一乗を学
べし。但し母世ふ在ん程ハ朝夕の禮を尽〳〵孝行を尽さんと思へども有為を厭
無為ふ入るハ。真實の報恩なりと云。一旦の別を歎ふ。永き日の歎を残し
ゆくこゝろを慰めんと思ふ。母ゝ〳〵道理ふ入て〳〵なれども。袖ふあまる
悲しみの志のびがたく見えけり。稍ありて備いつの頃上りゆくぞと問ハ明日
こそ参ふ。母ハ涙ふむせて是ハけ〳〵なる。日の吉凶を〳〵。供の者ども揃へて
出立をぞ〳〵とのたまへバ勢至丸頭をうち振。自ら在家ニ候て。公方へ出仕ふ
も候ハぬ。尤日の善悪をも〳〵候事なれ〳〵此度の登山ハ。隨分遁世の志
ふ候らへバ。供の者と山まで送ふ候ん程。二三人ふ過べ〳〵。その事ハ御心
立をこそ吉日にて候らへと言されれバ。母を今ハ為方なくて。終夜衣裝を裁縫

朝ふなれバ涙をうかべ。勢至丸の髪を手ぶ〳〵結い。衣裝を着せ〳〵ぞ用意
も調へバ馬ふ乗しふ従者三人を添られ。得業ならも同宿の僧一人従僧
一人贈文をとゝ〳〵もて従ぶ〳〵む。時久安三年の春勢至丸十五歳なり。
一説ニハ久安三年の春二月十三日ニ云。正源明義抄ニハ。天養二年三月昔。義作
ゝ立霊佛夫社ふ参詣して。偏ふ学文の宿願成就せ〳〵ゝと。祈誠をぞ〳〵
去程ふ聊日数を経ぬ。同晦日京を著。明ハ卯月一日なり。兒出立のぼ
んしゆ。供の者ふまもしろ。流石山門ハ目耶〳〵ゝ。俄ふ今日御髪をぞ
ゞゝ行水なれども候らへと言されれバ。兒ゝ〳〵ゝも母の今日と止ゝをもふ
ふ停まゝで京を逗留せんとまゝ〳〵。行水せバ何の詮なきんとて出立ぬ
供の者ふつゞきく登ゝ〳〵ゝと云
ゝる程ふ勢至丸ハ日と重れて上京ふ。即時ふ山ふ上りゝ。下ふ私のぼりそ
貴族の御出輿ふ値奉る。見物の人ふ〳〵九條関白忠通公と申す。急ぎ馬より

余育ニハ上人十三歳の時なり

下て木陰ゝ立ち潛びゐ給ふ。殿下車を駐め。使者をして問給へば。児実相答へ。
何国より何方へ往ゐ給ふぞ。勢至丸答て云く。我は美作國のものなるが知人を尋ね
来れり。山門に登りて出家し。父母の菩提を弔ひ。普く一切と利せんことを望む
候ふと。殿下重ねて山門の本房はいづれぞ。答て云西塔の北谷。持宝房の阿闍梨
源光の許へ登り候ふと。公宣く。勤めて学問怠らざれ。又再會すべ
と給へて。こゝを往りたまひぬ。程なく勢至丸は馬より乗り登りたまひ
或説云忠通公館に敢りたまひ御子義実公に語り給ふ。今日不思議の小童
に値ひ眼黄ばみて光あり。頭に圓光の形あり。凡人にあらず。年は十五歳西
塔の源光と頼て登山すと云。成長の後定て高徳の知識たるべし。口惜き哉
忠通年已に老たり。此人の化導に逢べからず。死後に於て汝必此人の化導に
依て出離すべしと懇に語て給ふ。故に義実公別して上人に帰依渇仰し
給へり。又正源明義抄には此上人に月輪殿下義実公

に勢至丸と御車の前に召れ。其故由と問給ひ。相ひて学文に心とゝれ
大碩学たるべし。義実公出家の師匠と成べく。御約束ありて殿下は御通り去程
に勢至丸は馬に打乗山に上り給ひて。供の者にも言さんなくば。深く言ふ
つゝて京に滞留せば。爭か一の人の御目にかゝるべき。既に殿下の御出家の
師匠たるべ。一天の君の御師範たるべんと。紫の門より。天晴学文の門出哉
と。駒とゝめて登給ひしと云。何ぞ是を知らざ
斯て叡山に登り。持宝房に著て紫門と乞。源光取次の詞に順ひ立出て
對面し。何國より来られしと尋ねに。同宿の僧の曰。是は美作國南都の観覚
得業。今は當國菩提寺に住山候ゝ御状の候て贈文を捧げたり。源光披
き見るに。玉章久通せば。互に心に萬里を隔たるが如し。積憂の至に依く
拙状を捧ぐ。貴殿いかん。抑正身の大聖文殊聖容一躰。これを贈る頓主
三月廿日 進上源光阿闍梨御房 沙門三會已講観學得業と書たる

文と見れば大聖文殊なり。児と見れば日ゝ黒くして何とも異なる相なれ。つゝさる児の器量と感じて。斯へ書たるものなるべし。児と止りて先試ゝ止観の要義と問ゝ子。敢て滞る處ゝ。源光嘆じて曰此児の神器。我指南なるべき物ゝなるべしと。功徳院の皇圓阿闍梨ゝ附なり

一書ゝ云く源光試ゝ先四教義を授ゝ。籤ゝして不審とゝす。疑ゝ所ゝる天台の古き論なり。誠ゝ凡人ゝあらざる申あるべし。此児の智恵勝れたる名誉あるべし。源光これ是愚鈍の者なり。智者ゝつけて天台古き義ときゝ。めんと云く。此児と相具して。功徳院の肥後の阿闍利皇圓の許ゝ伴なれる。此皇圓ハ栗田の関白四代の後胤三河権守重兼の嫡男ゝして少納言資隆の兄なり。隆寛律師の伯父光学法橋の弟子なりて当時の知識一山ゝ秀でる人也阿闍梨勢至丸の智恵深き事と聞ゝおどろきて去る夜の夢ゝ満月菴ゝ入と見る。今此児ゝ値べき告なるべ

よゝ悦び申されるべしと云く。又正源明義抜ゝ上人十三歳の四月朔日ゝ持宝房源光阿闍梨の許ゝ至りて有。斯て今夜其児の器量と試んとて。四方八面の物語なるべし。夜ゝ入て後の事なれば童子ハ田舎ゝて何ゝ問ゝ。勢至丸答て曰く。田舎のことなれば。僅ゝ。くしく差る物と誦ずべ候と。源光これ聞て内典外典の物ゝと委く問ゝ。元御尋の分ハ誦ずして候と答へ奉る。偖ハ大略残らず誦ずべしと。倶舎論いかゝと問ゝ。未だ誦ずと答へ奉る。源光さらハ夏の初ゝ六百行の頌と教へ申されて。本書とひき一遍誦してきかせ。是と今夜の中ゝ覚へ。朝源光ゝ聞せるべしと。勢至丸うけたまはり候と領掌しるべし。源光臥さるべし。勢至丸これと重ねて云ばく。此程の業つれなく。前後も不知睡眠しるべし。そもそも夜とあけのれば。源光ハ兒とおもひけるに。夕誦きかせ参らせし倶舎の頌いかゝとられしやと有れば。兒ハ答へ奉る故。源光ハこれいとをかしく。ゆゝ。只一遍聞せしのみなれば。いかゝ文殊と習ハゞしてハ叶ゝ

まゝ。況や稍て疲へれば。中々多くの頃ハ覺ること有べからずと思ひふ
處ふ。兒稍ありて云く少々覺こゝろと存候ふ。本書を以て御覧候らへ
誦して聞こせ申さんと云。源光さゝへて本書を以て見ハ兒も共
ふ本書と見ること如しゆへ。さいうくして。本書の方ハ見むきもやらず
ども諸一切衆生。冥滅拔衆生。出生死涅槃敬礼。如是如理師對。寶
藏論我當說とよまう。終の超勝五百應心待迎葉般羅釋三藏ふ至る
まで。一字も脱ずに六百行と空ふさらと誦せもとう。源光これを聞ひて
仮令本々ふ空ふ容易ふしがたし。大聖文殊の化身く
天晴我山の本願大師の再誕ふ。胸うちさわぎて不思義の
あるかと。兒をとくく見ゆべ。頂き平ゆて黒き眼ふ黄なる光りあり。是更ふ
人間の種ふあらずと感歎し。有無の言も出ざりるさる程ふ。昨日送て来
し。僧俗已ふ下らんと促もふ。源光返事と認めるゝ。其狀の文ふいはく。

貴札の趣き明朝の霧を拂ひ。夫貴方ふ向ひて拜見せ〻ふ候ひ早ぬ
抑大聖薩埵の御登寺。りつも一山の法燈。叡岳の昌栄なり。貧道淺
智。愚案老耄なりとゝ。明頭多輩ふして習学本望なるべき。頓首謹
言。大阿闍梨源光請文と云。尓後源光兒ふ對ひて。ゝるハ源光ハ是
一文不知の者なり。然るに禪房に立入ぬ。无智の身なれば。
奉るべき事ふ。かゝて申ゝまさば後悔あるべしと。勢至丸のつゝく。仰ハ
さる御事ふ。候へども唯不便の仰と蒙ゝ候て年月を送ぬ

明義抄

大意

既ふ十五歳ふ成ぬ。明義抄大意。偖て勢至丸ハ西塔の北谷功德院の皇圓阿闍梨ふ附りひて勤学。同年の十一月
緑の髪とそりて衣と著し。戒檀院ふおゝて大乘戒と受法名と善信圓明と
号を既ふ出家の本意とゝげ。吾年頃の願望ゝとぞふ満足せりと大ふ喜び
ひる。尓後時々師の阿闍梨ふとて僧衆の交ゝと辞して跡と深山林藪ふ隱遁

源空嵯峨の釋迦堂に参籠の圖

上人廿四のとし。嵯峨の清涼寺に七日参籠あるとき夢に法衣を来たる一支とのゝ僧あらわれ給ふ。こゝ此すの本尊は西天の雲と出東夏の霊山とゝ三國に伝りたる天人像なれ。ゝ願ふ志をこゝろざしひろめ。こゝろざしを賞えこゝろる

源空

せんことを願ひ奉るに、皇圓これを許さるゝ。御適は吾山の法燈、一山の明玉と人々もてはやすこと
あり。何ぞ今日此頃の遁世と思ふべし。たゞし隠遁の志あるも先宗教を練達
して後其本意を遂ぐべきなり。諫めて曰く、圓明は實に隠遁を務めんとせば
あるべく名利の望とやせん。静に佛法を修学せん為なり。此仰實に尤もなりとて
三箇年留学しぬ。圓明の智慧深きことあきらかにして其聞えたること四教立時の
廃立かくのごとし。三観一心の妙理玉を磨く。立る処の義勢きこゆ。師の教に超
たり。皇圓いよいよ感じ給ひて学文をはげまし大業をとゝのへ天台の棟梁とすべし
平生いまだ言されしかども更に兼引なべし。尚られ名利の学文をすゝめといへども
只管に隠遁せんことを乞ひ給ふ。皇圓これを志のあるに難きことなれば暇を奉
らん遁世しぬ。但日本中に閑居とたづねるも西塔黒谷の慈眼房叡空の御
房にはまゐり参りて心ゆき許りなり。圓明は殆ど喜び稍て時をも移
さず。師よりも禮をなして同宿の僧衆に暇を乞て黒谷にまかりぬ。時に

久安六年九月十日生年十八歳にして西塔黒谷の叡空の許にいたり給ふ
明義抄には久安六年八月廿六日左の手に茶筒を持右の手に茶筅を捧
て既に遁世に出たまふと云云。又或書には皇圓遁世とあるべしなまじひの
名利の学文をすゝめ師匠の所を出たまふと云
抑叡空上人と申は大宮摂政殿の御子にして良忍上人の御弟子にして京極大政大
臣高衡公の御孫にあたらるゝにて中御門中納言家成卿又小野宮殿にの伯父公なり
しかるに圓明十八歳にして此叡空の御房に参りて所学止観の談議の最中にて
老若五六十人集りおはしけるに圓明の来りぬと見て申あひけるは是に来る若僧
は當山無双の学匠の名を得たる圓明公にぞ候ふ。何なる法門を申談んとて参らるゝ
候とおぼしき。圓明は御前の様に畏まりて侍り。叡空問て云く。汝は何をとて来
ぞと。圓明答て云く。定て名字とべ聞しめされても候らん。持寶房阿闍梨
源光の弟子圓明と申者にて候ふ。遁世の志しに候ふとて参りたるなり。

と申上ぐ。叡空重て問ふ抑遁世とハ。過去の心が遁世して来るか現在の心が
遁世するか未来の心が遁世するか。過去の心が来るといへバ過去の心ハ去てなし。
現在の心が遁世すると言ハ現在の心ハ不住なり。未来の心が来るといへバ未来の心ハ未
至らざるなり。佛心即魔界。魔界即佛心。一心為一念遍有法界也と云へり。何れの
心が遁世して来るぞと云く圓明答て言く過去現在未来の心と遁世せん。無
始已来今世流當来之所在煩悩流轉流浪面々者衆生有苦顕罪心なり。
此文の心にあられて参り候ところに時に叡空涙をながして言ひけるハ三塔に
学侶多しといへども。叡空可様に問たるに斯のごとく答ふべき徒ハ覚へず。御房
ハこの流轉滅滅の法門ハもや落居せしきたり其名ハ何と名のりたまふぞと仰
られバ善信圓明と申候と答へたまふ御房ハ實に法然具足の人なり今日より
法然房と字し實名をバ師匠の源光の源の字と叡空の空の字とをとりて源空と
名のりたまへと仰られバ今日より改名して法然房源空とぞ名のりたまひける程に叡

空ハ密教を稟受して圓頓戒を傳へたまふ。凡一切の経論。内外の典籍博く練。普く
究めずといふ事なし。保元々年の春源空年廿四歳（或云保元二年春三月四日年廿五歳）ほどく思惟して六
教法なし時に背かバ何をもつて人を利益せんと。嵯峨の釋迦堂に一七日参籠
し祈念したまひて懇ねり保元二年三月十二日南都の興福寺にいたり藏俊僧都
の許にて法相の法門をまなび。六経十一部の論に眼をさらし。四分三性の法門に玉
を磨きて奥儀を究めたまへり。平治元年にハ中河の上人にあひ奉りて真言の
秘法を傳授し。四曼三密の法門をさとりたまひける。永暦元年初秋にハ招提寺
の鑑眞和尚に傳戒を学び三聚十重十无盡をあきらかにし。應保元年四月に
仁和寺の寛雅法印にまみえて三論を諮ひ。長観二年の初冬にいたりて
慶雅法橋に謁して華厳宗を学びたまふ。鑑眞寛雅慶雅の三師ともに
其超絶を嘆じ。或ハ供物を贈り。或ハ章疏を寄附をとなり
一時源空華厳経を披き見たまふに怪き青蛇来りて。机の上に蟠ると見たまふ弟子達

大ふ驚く。其夜源空の夢ふ怪き女来て告く曰我は是天竺の無熱池ふをむ善女龍王なり。上人の佛法守護のため参る所なり。必ど怖ずことなれと示し終てたちまち消ぬ。幻のごく夢さめ早ぬるぞ。又法華三昧を修しゆるに正身の普賢白象ふ乘して道場ふ現ど。又暗夜ふ書とるに光明を照して白昼の如し。又真言観門の時は道場ふ入く。阿字観を修するふ五相成身の観行を現ず大日如来は是周遍法界の理自性清浄の本躰なり。非色非心の理かくふ三身満徳の形を示し。無言無説の佛。一實眞如の旨を説ゆ。斯のごく観念しなまつふ。五輪種子の観ふよりて九相の一身は无常の成るる所と観じ。益して道世の志しふ進こゆやぶ。或云永万元年四月上旬迫衛坂の西ふ卅巷を結び独学の志しあるこ隠居しゆるる是今の新黒谷の地なり

上人既ふ聖道諸宗の教門ふ明かるしゆ法相三論の碩徳両々ふ其義解を感し。天台華厳の明匠一々ふ彼宏才を稱むれども尚出離の道ふ煩いて身心安うしなで。順次解脱の要路を尋んなら。寢食を廢くられを業しなるるふ諸の論藏。三國相傳の聖教和漢人師の所釋一々ふ高覧あり。偶恵心僧都の往生要集を讀ゆいて。是は源信已證の法門なりと心とりて見ゆ程ふぐらて往生の業は念佛を本とすると知るひ余後黒谷の報恩藏ふ入く周く一切経を見ゆて五遍善導の五部九巻の疏曇鸞道綽の章疏ふを委く閲ゆふ第一遍ふは一代の経論と聖道門浄土門と二ふ分つべきことを悟るる。第二遍ふは浄土門ふ於て專雜の二ふ行ずべきを察しる。第三遍ふは大小乘の肝要は弥陀の本願名号の不思議なるべしと御覧あり。都合三遍詮る処観経の疏四巻ふ於て一心專念弥陀名号。行住坐卧不問時節久近念々不捨者是名正定之業。順彼佛願故なる。此文の下ふ此度の出離生死頓證佛果の道は弥陀の名号ふ限るべし。治定しゆる。習学廿三年。獨学十二年の学業をさしとして。安元元年乙未生年四十三歳ふして終ふ浄土門ふ入る。末代悪世の衆生極悪最下の凡夫の得道は弥陀の名号ふ於るべし。堅固の信心ふ住し。專ら念佛を修しゆふ

源空既に自行を修して他に及ぼさんと思しかども如何あらんと危踏思し召れけるに其夜の夢に紫雲一國に満ち无量の光を放ち其光化して百寶色の鳥となり中に高僧ありて腰より下へ金色身を現じたまふ源空問て曰く誰人哉と吾は是善導汝将に念佛を弘通せんとす故に来りて證明もとなりと覺て大に喜びひ是によりて源空の志決し一日叡空往生要集を講じ了て観佛三昧と勝劣を念佛と考へらるる源空坐して有て忘れ難しと叡空に恚て不興なりしが後に悔てこれを敬ひ叡空臨終に本尊聖教の類ひ盡くこれを源空に譲る安元年の春年四十三にして黒谷を出て吉水に移住し浄土の一門を闡揚し本朝眞宗を弘めし一國の人風を靡く艸の如し其化導を慕ひ高倉の帝禁中に招きまゐらせ菩薩戒を授けらる后宮妃女群臣多く戒を受けるのあり。

一書に治承二年十月上旬源空四十六歳なりし時黒谷に参じ慈眼房叡空に謁しひ久しく面會もあるべきと互に謝し御物語の序に叡空のたまふく。貴僧實に此迄年に念佛諸宗に超過せりと立ひて自も念佛に帰し人に道心を勧むるに念佛を生死を離るる是に過ぐる法なしと申さるゝ事爾や源空答て左候ふ此度の出離に念佛をもつて決定の業と思ひ定めて候へ自り修行いたすも他人を化益するも称名念佛を仕候へもしこれば其時叡空の曰先師良忍上人と観佛三昧殊に勝れたりと仰らるゝ事聖道修行の甚深の容と仰あるに源空は念佛の諸教に勝れたる様と互に廣学にして數文釈を引て問答あり源空の曰機法相応して得道決定する時機に相背く凡夫所入難かるべし造悪の愚人に観佛三昧の深理の法を望まんや弥陀の願力にすがれば出離不定と存じ候に叡空の云く凡夫にして聖人と言へ一向小乗なり生死を離べきす

法華三昧の道場ふ
普現菩薩出現し
給ふ圖

源空

一切善悪都莫思量ちらくハ。諸法と一佛乗と開會ちらふ何者か漏んやとて。
大きふ笑ひうふ。源空言く是ハ事新く覚え候ふ八宗九宗の法門ハいづれも勝
劣ちく候ふ。教のごく修セバ。其詮とあくちうんと掌と返さんが如く。其段素
より不審候ども。機法相應して凡惑ちく得道せん方とハ叶ふまく
候や。文證とちて言上候ちんうと。叡空くく腹立ちひ。汝ハ誰かあひて習
所の法門を。流石ふ叡空ぞ智分ハ物ふたくバ大海の如く汝学匠とおもふ。叡空
が下ぞし我ふ向いて斯ちと言ハて責ふ。源空迷惑ちる面色ふて。是ハ
法門ふて候ぞ。一向諍論ちて新く候へおのれちうぞ。判者たふ候く落居
ちく候ちめと言ひれば。叡空腹ふ居うねて。念佛勝ちたくバ汝ちう
言セ其処まりち支て御傍ちる枕とちて投つけふ。此ちに御前ちる同侶達
申されうハ。斯ちと仰セ候ふ先ちちと言ひれば。源空力ちく立ちて
善導和尚く上来雖説定散両門之益望佛本願意在。衆生一向專稱

弥陀佛名と釋しうう。称名勝ちうちて明ちう。聖教とびうく御らん
候らうぞと言ふ。叡空まちく腹とちて。醫王山王も御照覧あれ。自今已後師
弟の義有べうずて。據まで追く出のひ。足駄とちて追さのふ打なまくバ
尤の耳の上ふあうう。紅ふ血しいうぞれて迯のひく時ふ同宿の僧等。大方
ちうちにて思ひあひる人ぞふ勝れうと猜ち者ハと畢ひちうしあく
此程余ふ学匠ちて有つふ。最きちく。甚工人御誓状ちて御打
擲あうう人。容易免しうと有まくてみく密語ひく
同三年二月叡空病ふ卧しうひる由。源空傳聞のひて登山しうひ忍ひて御房
ふ参ちうふ。学秀僧都とび出し言ひうハ。御違例のく兼候ふ間御老躰の
御支ちて候へいうと存しく登山住う候と言へふ。学秀僧都喜びていく。
上人此ちうと仰セちうしに。三百余人の弟子の中ふ法然房八誠の大学道ち
叡空が怒うとも本意ちん思まく。されハ偏念ハ行しぞ仰られ。嬢しく も

登山しるしの武士ども忍び待ち、首尾よく討い申さんとて傍の間に置く稍く学秀は叡空上人の病牀と伺ふ。叡空目とゞまり燈を近くとのゝして侍各に對ひてのたまはく人多くとゞも法然房に心あるとのゝ。叡空は明日辰の一天に臨終をとゝのへきと。法然房は如何ぞとゝ仰られい学秀の言く。法然房は内典外典に通じ学道道心者にて候らへば先達ていらせ給ひしと聊遺恨に存ぜざるべし師病着に卧ゝて兼て候へは登山仕る余所兼ねて事は候らじ。あれども先頃の御制文に恐をそれ近房に候らんも知れぬ候と申ゝを。叡空言く。おのれ来れり何哉と言ふ人とあるとりもなおさず学秀坐を立て稍ゝく有て出来て。折ふし法然房まいりて候と言されば。叡空これを仰ぎて。源空御前に畏る。叡空打笑ひ。うれしゝとも来たりたまひぬ。去頃誓状せし上打擲に及ばゝ定て無念に存ぜんいかゝも登山はあるべしと存じつゝ只今来臨あると聞び入侍る。一期の對面是ぞ限りなるべしと御心底のゝも哭々御物語あるて書記せんとて硯紙を召まして自筆に認ゝ給ふ。當世の人々今何と書せ給へるとおもひあるべ。是は聖教を讓状にして其文に云く讓渡聖教之事北叡山西塔黒谷の経藏に置ところの五千余巻の経論北白河中山の経藏に安所の三千余巻の聖教。残るところなく讓与る也。仍状如件

治承三年己亥二月日　　叡空判　　法然房と書こう。此時了

いつて日頃源空と猜ゝ謗ゝ同侶児達に至るまで此あるを皆一統に口と閉。智者と智者との論談子細あるゝと密語あして偏執と失ひ中にも浄憲法印は師の杖の弟子にあるは法門の印形にて面目うゝと感じ給へ。叡空御急病と披露あるれば。諸方より檀越の徒弟来集九四五百人もあるゝ。偖叡空上人其夜も明るれば。本尊に向ひ威儀例のごとくして即悟三昧に住て終にあるゝ。満座の諸人涙法衣を沒し阿難尊者の恒河の

辺あて。四十余年の化義ふるゝて。三昧定ふ入ゝ如し。時の哀傷師弟の余波共ふ
盡しゞ〻に事もなう斯て有べき支ゝねば。御棺と云ひ入棺し奉る。西三日と経て
既ふ荼毗し奉らんとする時。叡空御棺の中ゝ。此棺の蓋を引けと仰出さる各
驚き騒ぎ周章て。空信学秀御棺を開たれば棺の中ゝ自ら起上て御手
と引をそ出させひ。源空ふひ坐具をの〻三禮をあ〻。源空本地身飯命大
勢至化度衆生故於娑婆出現と三度とゝなひてのち御座ふなほる。
諸人ふひ泪とゝのび言ひるゝ。法然房と炎魔王宮ふ御沙汰あるゝと聞て
今こそ存じられ。我未ゝ定ふ入ゝ所ふ焱魔大王来現して。大日本國
源空の本地叡空ふ拜せ〻んと。諸して云く。源空本地身大勢至菩薩衆生
為利益。度々出現故と諸して去ぬる。斯る薩埵の化身と罵て打擲し
る罪障を懺悔せんゞ為ふ又蘇生をゝるゝとして。硯と紙とをゝして讓状と
別紙ふゝて。四明天台の沙門叡空判 進上法然上人と書るゝ。源空ふ奉

ほるふ偖叡空源空ふひ十念相續して往生とげひる。先ふハ三昧相
兼して即悟三昧ふ住して終ゝひる。今度ハ念佛三昧ふ治定して禪定ふ
入ゝ。御息絶させひる。觀佛念佛の両益とあ〻。二度往生と遂させ
ひるふ因ゝ地ふゝ廣谷の藪と云ふ處ふ居と云ふ。又幾ゝ年ゝ経ゝ年ゝ東山土石水の
澍とのゝ念佛の行と云ふる化導日々盛んふ念佛ふ帰ゝ雲霞のゝ如ゝ
又一説ふ善導大師源空の夢ふ現じるゝハ。治承四年庚子源空御年四十八
四月七日の夜の事なると云。尤夢想ハ高山の中程ふ源空ゝて見ゝるふ。
南地遠く西ふ向て。峯より三重の滝落て清水清々ゝして麓の大河
漲て流る。其傍ふ大道の通驛あ〻。男女多く往反そ〻るふ西の方と見ゝハ
地より五丈ゝ上て空ふ一群の紫雲あて。此雲飛来て源空の所ふ至
此紫雲の中ゝ。孔雀鸚鵡ゝひ百富の色鳥ゝび出ゝ四方ふ翔る。其
眼ゝ光明と放て十方と照ゝ。又其雲の中ゝ一人の僧現る。其姿

腰より下は金色にして上は墨染の衣なり。容顔微妙にして老年六十ばかりなるが合掌して胸にあてて高聲に念佛し給ふ。其念佛の聲ごとに口中より化佛まします。源空問ひ給ふ是は誰人にてましますぞと。僧答て我是大唐念佛興行の祖師善導和尚なり。汝專修念佛を弘る故に来れるなり。今高山の頂きに是念佛三昧。万行万善の上々の頂きと表する処なり。三重の滝は江河のごとし。汝が勸化念佛三昧の法水法滅百歳の時まで利益あるべき瑞相なり。百寶色鳥眼より光明を放ち汝が頂きを照すに。六方恒沙の諸佛。汝を護念したまふと謂れなり。十念を授けたまひ眉間より光明を放ちたまひ。沓香薫じ給ふと夢さめぬ。源空おどろきて是を思ふに。是正しく我念佛利益の海内に普く流布して瑞相なり。夫より念佛の信心ふかくましませり。

治承四年十二月廿八日　本三位中將重衡卿。父平相國清盛の命によりて。南都を攻められ。東大寺に火羅りて大伽藍忽ちに灰燼となる。是に仍て後白河法皇再興を企て。旧例に准四方に勸進せらるる。然れども事容易なるべき筋にあらず。其人にあるべき功成べきなり。大勸進の聖の評議有りけるに。源空其選びに當たりぬ。即右大辨藤原行隆朝臣を勅使として。大勸進職たるべきの宣旨云。南都の佛法滅亡の条。朕愁歎に思ふ。工人いそぐ同心せざる賊徒等七大寺と亡ぼすべし。余は悉く閣東大寺に入れ先皇の御願なり。十六丈の盧舍那佛一時に破滅と。御身量震襟して置くべきに思ふ。早く工人鑄仕と加へられ宣し。佛閣を建て佛像を安置せばば朕が喜悦のところ也。先奉加に奉るべし。源空宣下の趣きを聞て召。勅答申されぬ。御宣旨を仰下されぬ。源空山門の交を遁れ幽に住居せんと閑に佛道を修し。念佛を勤行せん爲なり。且は年齢つもり来て。造営そ期を辨へ難し。就中山林籠居の身に斯る大勸進最愼と甚しく假に

重衡
東大寺
を燒亡

治承四年の冬南都の大衆平家を怨む事あるて蜂起騷動して靜らぬ是ゆゑに平相國清盛入道追討使を遣さんとて十二月廿日藏人頭重衡朝臣を大將として其勢三万余騎南

都へつるさる同廿八日重衡三万余騎を二手に分ち奈良坂般若路より推よせ時をつくる衆徒も用意のことなれば時を合さて散々に防戰るに播磨國住人福井の庄下司次郎大夫俊方といふもの重衡朝臣の下知をもて楯を破て續松を酒屋在家に火をけ折節風烈しく猛火吹覆東大寺興福寺の佛閣諸堂諸院一宇も殘らず燒亡せりと源平盛衰記に見えたり

自余の貴禅房へ仰せ下されん候べし。固く辞退申されり。法皇源空の御
答と聞召。押て仰下されりゐ。弟子等の中ゐ然るべ紀器量の徒ハ指
図申れとゝ源空まゝく。若俊乗房重源と申しゝの此職と兼るべしと存
候とありしれバ即ち勅使あゝて重源と召さる頓て参内仕る。是ゐりつて大勧
進職ゐ補せらる。重源左右なく領掌し奉る間。後白河院の御奉加ゐ云
奉加今ゐる佛閣造営とゝ紀支右奉加ゐ至りて。東大寺。佛殿金堂講堂
戒壇院。来迎堂。鐘楼。経藏。佛閣寺。聖殿寺。鎮守。拜殿。湯屋。大透牆。凡
目録斯のごとく造営の間防州とゝりて私領しゝて。造功とりもべ紀匠の大工。
侍従大納言種安ゐ補と宣く諸人助力とべし。奉行左少辨行隆ゐ下知と加。
仍執達如件　養和元年壬辰四月日　参議弾正少弼藤原朝臣泰定
俊乗房ゐ奉る御奉加の目録奉行大工一紙ゐのゝ。重源ゐと給りて。
源空の見参ゐ入まゝりてゐ。奉加の趣きゝと見たまひて仰りハ天晴阿僧ハ

推者ゐる是程の大勧進と受られりゝ。言ひしとも也
一書ゐハ此時の勅使ハ藏人信國とゝ。又重源と澄源ゐ作る
俊乗房名ハ重源。姓ハ紀氏滝口左馬允季重の三男。刑部左衛門尉重定
出家と。仁安二年宋國ゐゝ建仁寺の開山栄西禅師ゐ彼土四明州
ゐて遇く相伴ひ天台山ゐ上りゝ。翌年の秋栄西と偕ゐ吾朝ゐ飯て。後源
空上人の弟子とゝりて名と改りて重源とゝ。東大寺れ大勧進職ゐ補せ
られ。即ち一輪の車と作る其大きゝ身と容る可ゐして車の左ゐ詔書と
貼て。右ゐ幹疏と貼て。州縣と巡行し。万民と勧ゐ十餘年と経て成就
と。元久二年六月五日寂と。或云六月壽八十六と云
ゐ後重源ハ伊勢大神宮へ詣て。三七日の間参籠し。我此度の重職ゐ
の名利ゐ。偏ゐ伽藍草創の為ゐ。何とゝ速ゐ成就圓満せしゝ。
丹誠と抽で祈請とゝりる。ゝりゐ三七日満る暁の夢の中ゐ唐装束と

せ童子方すの玉を授るたまを見て覚てこれば彼玉現ゐ袖のうへにあり。
重源あるゝの尊さに感涙せきあへず是と得て首にかけ。諸國へ勧進せ
るに。綾羅金繒錢貨米穀金銀銅鐵絹布綿馬のたぐひ心に任せて
出来るに風に艸木の靡くがごとし
壽永元年七月上旬に源空上人。上西門院の招請にあうて。七日の間御説戒あり
沙弥戒。具足戒。少律義戒等の御説法あり。女院をはじめ官女群臣感涙
をながすもの多し。一の小蛇。初うち唐ゑの上に蟠屈。七日の間動うごかず。とゝく
耳と側てそ聞とゝ。説法を聴聞するに。奇異の思をなす
廻向結願あうて講會をする時に。彼小蛇唐垣の上をうつりて落死しぬ。
その小蛇の口より十二三ばかりなる童子唐装束して鬟丱ひたりに。天をさして
昇るを。女院月輪殿に御らんあり。以下の人々の目に。蝶出て天をさして上るとみる。
る処に不同なれども。正しく蛇業を免れて天上にうまれと感じるいにしへ恵表比

丘武當山にして無量義經を講讀せしに。聲をきく青雀歡喜苑に生ずると
斯の如きことを思ふに。此小蛇も大乗の結縁にあうて天上に生を侍るべしと
源空上人は既に聖道門を捨て浄土門に帰し。念佛三昧の大導師成ぬ。
これは恵心僧都要集を作て。念佛往生を勧めるを。すなはち日本に浄土宗と
いふ宗旨をしる。又禅林寺の永觀律師。往生講の式。往生拾因を編て念佛
往生を勧めたまへり。是も又浄土宗をひろめ宗旨弘まるに。天竺大
唐に浄土宗といふ宗旨あり。天竺にあるには菩提流支の聖財論に出
又唐土にあるには元曉の遊心安樂道。慈恩の西方要決。加オの浄土論に出
なり。さる程に源空上人。天竺唐土に浄土宗といふ宗旨のあるをと考へ出して。
日本にあらはして念佛往生の宗旨と初めて弘め浄土宗と号し。六十余州に
弘めて。他力の信心を勧めるに念佛往生の太祖なり
偖又源空上人の山門にて初めその師道乃し。持害坊の阿舍梨源光。慈覚

大師の譜弟。慈惠僧正の徒弟ゐて。惠信の僧都。皇圓阿闍梨等ゐ弟子
なり。則光学法印の写瓶ゐて四明天台相生の流ゐ於て。天晴の明匠と称ぜ。一流
の長者なり。然るゐ斯る碩徳と諸宗の習学ゐ。やがて又いろる異
樂ゐ住しゐ。此度の修行ゐて成佛ゐ。然れども人ハ生と更れハ
隔生即忘ゐて。今佛法修行ゐる処と忘ゐ。所詮生と更ゐて。弥勒
菩薩の出世ゐ値奉て。悟を開んゐ如し。かもハ長命せどんば叶ふ
長命の術ハ蚍身ゐてこそ有べし。何の國ゐ然べき池あんこそ。弟子
等と諸國ゐ遣ハし見せゐ。時ゐ東海道と巡歴せし。但馬の註記
澄算ゐる小僧ゐ登て言や。遠江國笠原庄ゐ櫻の池こそ侘ゐ南ハ
滄海万里ゐ。北ハ山林森々として海と去ること遠ゐ。奥ある池ゐ
侘くときゐ。源光これを聞なし。其領主ハ誰ぞとのたまひれば徳大寺殿
の所領と申と侍ハ源光ゐ檀越ゐ。いかも惜ゐ所存ゐ。沙金

百両と与へ永代放文とゐて。去嘉應元年六月十三日命終の夜半ゐ掌ゐ
水と化て是と化して終ゐ没ゐ。其後雨ゐ風吹ゐ。彼池ゐ水ゐ
水増て。大濤ゐ池の中の塵悉く拂ひ。諸人耳目と驚ゐ。
彼所ゐ領主ゐ注進ゐ。時日と考へゐ。彼阿闍梨命終の時日ゐ
と有ゐ。當時ゐて静ゐる夜ハ。池中ゐ鈴の音聞ゐ。言傳ゐ
源空上人の言く。智恵ある人ハ生死出ゐと知る。道心の人ゐ佛の出世と
願ゐ。浄土の法門と知ゐる故ゐ斯の如く異樂ゐ著ゐ。我浄土門と
今七八年已前ハ見出しゐ。師道ゐ往生の益と授奉ゐ
べき。口惜き哉と落涙ゐ。御弟子等言く。聖道門の諸宗
ゐ依て生死と離ゐ道ハ侯ゐと。源空言く。一代の諸教區々ゐ皆殊
勝ゐ。初華厳の事理圓融。法華唯一心の觀。阿含の四諦縁生觀。方等
の彈呵。般若の盡浄虚融の觀行。法華涅槃の唯有一乗醍醐捨拾

の妙薬。顕密大少権実みなくその益甚し。斯の如く深理の法門は習学すると
いへども是を行し遂るをかたし されど源空はいづれも大略修行せしかども末世におよび
濁世にあたりぬれば機分かなふべく得道なさんが時機相應して念佛の法に
治定して弥陀の誓約を頼み奉るべしと仰ける。其後志あるべき弟子等
四五人召具して遠江國櫻の池に至りたまふ池はもとより塵もなく草も茂らず
漣漪たる上人ちかく徒弟ともしく阿弥陀経と四五巻念佛數百遍なし給ひければ。
淺ましき大蛇のすがたにて水上に浮出たまふ。源空悽落涙しつゝ願くは
誠の源光にて渡らせたまはば。本身に復して現はせたまへ。斯のごとく異楽に住せしも
給ひしも愚案の甚しきなりと引導ありければ。蛇形忽ち水中にしづみて
後行法の躰を現して又浮び出たまひつ不思議なりし事どもなり 明義抄大意
然るに源光寂したまふ時嘉應元年と有ば源空の言ふ事と考れば仁安元年
中の比なるべし 又一説には 功徳院の阿闍梨皇圓蛇身と成櫻の池に住給ふとあり

功徳院皇圓を叡山椙生法橋光学の弟子にて。源光の師匠なり。顕
密の学者にて源空第二度目の師なれ。何なる是なるやとなれど
叡山天台の座主権大僧正顕真と申碩徳おはしまし。其初はまだ大僧都にて
おはせし時。兼安三年生年四十三にて官職を辞し。菩提をもとめて大原に
籠居なし給ひて。生死の出がたきことを嘆きたまふ。斯て春秋四年を経て又山に
帰りて行法を修し。松の戸をとぢ潜に隠遁におもひをよせしが八年ばかり
常に永弁法印と。出離解脱の事をのみ詳ぜられたりしが。斯の如きことは源空上人
に御尋有べき由申されたりけり。頃は文治二年の春。相模房と云僧を使として。
源空上人の許へ遣され。山へ御昇りありて心に訪られたし。申兼て侍て度
との候由仰られしかば。源空坂本へまゐりて斯と申されけり。顕真おほいに悦し
あひて。坂本にくだり對面しけり。問て云く。此たび如何して生死をはなるべき
侍るべきと言ふ。源空いふよう御はからひに過べからず。顕真まことにさなり

櫻池ハ
源空
師の靈
ハ謁ゼ

櫻ノ池ハ遠江の
國笠原の庄
ノ往昔源
空上人の師法
源光阿闍梨
弥勒の出
世ヲ待ん
ト入寂の
後大蛇ト
成テ此池ハ
住ケル今モ閑夜
ハ鈴ヲ振音
聞ケルトテ空上人
のゆくゑ師の主世
ハ浄土門ヲ弘ムルハ
斯ルすゝしハ取セた
てまつるゆゑなり

但し先達しておもへれば若愚い定りなふ宗あり示しぬべし。其後源空上人云く
自らの為ハ聊か思い定めし日候へば。唯ひたすら往生極楽とこそ候へ。
顕真のつたへ。順次の往生遂ぐるを候て尋言に所なり。如何して此ならび容易
往生を遂ぐべきや。源空の云く成佛ハ難しと雖ども。往生ハ得安し。道綽善
導の意ハ難しと雖ども。佛の願力と仰ぎて是を縁とし。凡夫浄土に往生すと。其
後たびたび問答言説をくして。源空別を告て帰るあり。斯く後顕真のた
まへり。法然房ハ智恵深遠なりといへども聊か執の失ありと云云
源空此ことを傳へきたりてされば我志ぶかくと云へば必ず疑ひの心を発
すの也とこれを又顕真人傳ふ聞たまへり。命ある我顕密の教を
ならひて稽古をつもりぬれども。ただ名利の為にして。浄土を心ざすを
道綽善導の釈をもうけがるべし。法然房あるべんば。誰人か如此ならば
出ぬべきや。此言ふ聊か百日の間大原に隠居して。浄土の三部経天親
龍樹の論文善導の五部九巻の疏。その他諸師の五祖の釈論章疏を閲し
ぬ。義理を案じ考へ良久しく。其後弟子等に対いての言く。顕真既に
浄土の法門を見覚えり。夫少きて不審多し。今この不審を法然房に
諮ぶべし。有るべし故に法然房を招請して不審を明きらめ晴れば
各こと云へり。出離の大事の御法門聖道浄土の折角とは。爭か御一人して
聞き給へ。此邊の碩徳達學面々と召聞しあれて。不審の條々を
立仰せ給へと言へば。さらば各々ひ候へと仰られば。相模の阿闍梨
に週文を書て持て週らせ。法然房の方へハ侍従己講を使者として仰せ
られ。先項言せ。浄土の法門こそ程大原に隠居して見覚え侍べる
夫ならば諸宗の諍ひる処相違の間。洛居のこと言と。必ず其日立てこそ
ゆべしと法然御返事云く。兼知せり候ふ。参て兼て思案をとゝのへ
るべしと云々。さて顕真僧都の週文に付きて。文治二年秋八月上旬洛北大原

勝林院の立禪寺ふ當日集會（林達或丈六堂云）する八宗の碩学ふ。光明山僧都明遍（嵯峨寺解脱上人也法相宗）侍従已講貞慶（笠置寺解脱上人也法相宗）長楽寺の印西聖人（所々の天台浄土と裏書）嵯峨往生院の念佛房（天台宗）大原遁世の人々ふハ當所大原の本性房湛叡（八宗の碩学）来迎院の明定房蓮慶（天台宗）菩提山の中尾の蓮光房（東大寺の僧）蓮契上人（師弟十餘人）山門久住の輩ふ。大僧正智海（天治碩徳）権大僧都證真（天台宗）静厳僧都竹林房（真言佛心天台碩徳）権少僧都覺行（浄然法印）権少僧都空阿房。慧光房此外如覺寺の上人。覺行僧都亮禪。菩提山藏人入道。佛心房安然（野山真言）長楽寺定蓮房（天台）八坂大和入道見佛（天台）松林院清浄房。櫻本の宛法房。聖光房等也

（古ハ大原談義聞書抄大意）又明義抄ふハ此外ふ浄賢法印。浄憲法印。仙義律師。学秀僧都。浄寧法印。生馬の上人。松林院仰德房。觀佛房。神楽岡の浄空房。中山の信蓮房。浄遍僧都。實惠上人。實雅法印。慶雅法橋。醍醐の座主空範。石山の僧都覺圓高尾の惣蓮房。寶寺の求法房。仁和寺の勝願房。能顕僧正。顕真僧正。梅尾明恵上人と加ふ。就中明恵上人ハ傳云く。兼安三年正月生る。九歳ゟて高尾の文覺ふ従ひ。十六歳ゟて剃髪。十九歳ゟて梅尾山ふ住す。盛の賢首宗と唱ふ。ゑ撰ふ文治二年ハ十四歳ゟて。未得度する已前ゟ。此ハ此ふの論義ふ。集會あるべし非とするべさ歟

右證真静厳寺已下。山門の碩学三十余人并ふ南都北嶺の有智二十余人催ふ依ふ参集と。覺行僧都亮禪。聖光房等と首領ふ。諸宗の碩学二百余人三井の大貳僧正公胤上首として門徒の学徒百余人。其余惣して廻文ふ預ふれども。心ある老若大学徒三百余人。あるひハ偏執の徒ある或ハ真の道と嘆たまふもあり。彼是集會して列座ふ。其余聽聞の道俗貴賤二千余人来集と。源空上人ハ斯のゝく南京北嶺寺院邊土の碩德大学徒念佛偏執の人々集會する程の大義ふハ夢々もろしかゝべ。唯後生善提の為ふ聖道浄土の相違自力他力の衆生の機分等。安心の所詮

と思ひ御弟子も唯世の常の法談と心得。かゝる道とハ覚悟ぬハされハ。何の用も立まじ。初心晩学の愚癡元智の入道等ばかり供せられたり。其中も東大寺の大勧進俊乗房重源。隆寛律師皆空。安居院法印聖覚と上首として彼是二十余人ばかり。源空聖人ハ例の事と思召て龍禅寺ふ至りひて寺門をさし眼を見ひらかハ三百余人の高僧二行ふ列坐せられたり。發起の顕眞上坐して左のかたハ大原の本性上人堪敷右の方ふハ實範碩徳。左右ふ別をく著坐あり弟子の人々是を見く。あるや此ども生々所々ふしく。法然上人浄土の宗義を立せられたるを沙汰し。或ハ憤を難ずる徒の折を得て各同心し来集せしと覚えたり此ども聖道浄土の勝劣大小権實の裁判結句と見えてぴろる文珠舎利弗の智恵ちりとも叶ふまじ。三百余人學僧ハ上人法門ふ結伏ぬく。我情の手枝をあてなそらう。永く浄土宗の旗を倒し折んと。義定の氣色あるべきなり。實ふ古今稀代の宗

論得道の折角なり。源空一期の御大事これふ過しと見え。御弟子達い我師匠今日を限りふ失ひなんと思ひあり。諸經の肝要一代至極たる此文ふあらんを破ぜんと思ひて心も身ふ添ど。然る所源空御弟子等ふ言皆人ハ見て扶持し。髪をとりて手足を洗ひ。物を敷くして骨を折て弟子と持ふ源空ハ久く骨をも折らて二千余人の弟子と設くるをとりびゝ。其時御弟子等此御詞ふ少し力を得たり。さる程ふ源空ハ群を集ひ聴衆をとゝ分く入給ふ正面の脇の間より望の。源空の御供の中ふ信濃國住人角張の七郎太郎入道成阿と云者。上人の御袖の下より潜通て上人の御前ふ立塞て。當坐の氣色を見まゝ上座せられたる顕眞ハ高麗縁の畳二帖重ねて其上ふ狐の皮を敷く座せられたり。上人の御坐と見て大紋縁の畳二帖重ねて敷く見ふハ人も座せられば成阿思ふ上人の御座ふハ敷皮なり。されハ一段さがるべし。此彼と見

廻せども物もうく如何ハせんとやうひ煩ふ程ふ礼盤ふ二重縁の半帖あり是を見て成阿ハ末座なる若学匠どもの居るひくる左右の袖と分けて無禮なるまわり通り候ふ。上人の御座をひらく候ものと止を得ぬ候て。そと通るく佛前なる禮盤の半帖をうて上人の御座ふ重ねてゝ。後座ふ跪檜扇を抽上人の方ふむひ。是をも御座ふて候らく入せゆと言と源空ふかち座ふ著なまくべ。余人い座敷なくいくぶせんを煩ひなり。成阿いくや御房ふち是〔参〕なり。今日ふ限り自宗他宗の得否今日と限りく出離一大事の御法門聴聞仕ふと。我人界ふ生を受る幸ひなれ。人身の思ひ出。宿善の程是なるべしとて打笑ひ居なるなり。余人い成阿が詞ふつきて一度ふ入く。上人の御くなる佛檀のまなふ居流まなり。三百余人の学匠若手の聴衆等目をとめて源空の御貌をまもり。成阿が挙動と見ゆひて。假令打詠しなるも只今の中ふそ可様ふ挙動べしも覚ず初声の一言と以て法性の深

厚と知るとゝ云。法然房の智ふ我等と屑も思ふめ〳〵ふ。今此入道も斯の如く挙動なり斯る形勢ふて八今日の問答ふ必ず結ぶめべしと思ひひ。後ふ懺悔ありしなり。源空當座の氣色と見ゆふ。其日の問答の問口ハ大原の本性上人と見えなり。題者ハ南都の範顕僧正。精義者ハ寶持房法印。註記ハ嵯峨の竹林房法印静厳の前ふハ大巻のつぎ紙〔巻ふ〕なり。範顕僧正の前ふハ釋柏子一帖なり。是ハ源空ハなるも法門ふ煩なるハ打々なるなり。もべ立ぎ料と見えなり。九月支震旦ハ志〳〵。日本一の宗論なり。さる程ふ座敷さぐまり東西もなるなり。此時第一番ふ顕眞僧都問て云く速疾ふ生死と離る解脱と得るハ。眞言。止觀。華厳。禪門等と以て最上なり。至極とするいん。源空答て云く法門無盡なれども其急要と論ずふ浄土の法門とをもて勝まるとし。諸教廣多なるとても。其肝心とさるふ他力頓教とをもて勝まる寺是則ち修し易くして功高し。行し安くて理深

大原立禪寺ハ
於て諸宗法論
の圖

大原問答の古跡ハ
京洛北山大原の郷
ふ今奥山勝林寺
といふ本尊を證據
の阿弥陀と号と
文治二年法然
上人と山門の
學徒諸宗
の碩徳と論
議あり〜と記
本尊光明と

法然

放ひし〜そ
則ち專修念佛
の利益他ふ超過
せ〜證拠と知ら
しめたまふ處
なりと

故に故に故に廬山師の云く。諸の三昧は甚多なれども功高くして進み易き事は念佛を先とすと云へり。元照師の云く。念佛三昧は。具縛の凡愚屠沽の下類を刹那超越する成佛の法なりと言て。此等師の意淨土の教法。念佛三昧とをもて大乘至極速疾解脫の最要なりと聞えき

廬山師は尋陽匡廬山東林禪寺慧遠法師なり。廬山は南康府の西北二十里にあり。古周の武王の時匡俗兄弟七人。此山に廬を結んで隱居せ故に具に匡廬山と名く。其山高さ二千三百六十丈周二千五十里。慧遠は師の諱。姓は賈氏。鴈門據煩の人なり。唐の大中戊辰年。辨覺大師と謚を。南唐の昇元三年に。正覺大師と謚を。宋の大平興國三年に圓悟大師と謚を。宋の乾道二年。等徧正覺圓悟大法師と謚し。諸傳に委し今爰に廬山師と引證の初に。誠に知る淨土宗自立の義あるを。漢朝の元祖と出を。是他とをしんと欲をるを。樂邦文類に云。淨土に

生ると勸む固に大覺慈尊より出。然して此方の人として念佛三昧あるをと知しめは應に遠公法師を以て始祖とすべしと云云

諸の三昧に法華に十六三昧と說。涅槃に二十五三昧と說。般若に百八三昧と說。加之大經に百千三昧と說。法華に百千万億恒沙等諸大三昧と說。仁王に無量諸餘三昧とをく是等の諸の三昧の中に於て功高く進易きは念佛と以て先とす。是を以て念佛三昧經に三昧王と說り。即此謂なり。問云何の諸の三昧の中に唯念佛三昧のみ功德高きや。答云諸の余の三昧は各一隅を守て諸の德を備へをる。唯念佛三昧のみ諸德圓備をる故に大論に云復次に念佛三昧は能種々の煩惱及び先世の罪を除く餘の諸の三昧は能嬈を除くを有て瞋を除くを能ず。能瞋を除くを有て能嬈を除くを能ず。能嬈を除くを能ず。能瞋を除くを能ず。是念佛三昧は能種々の煩惱を除くを有ても先世の罪を除くを能ず

惱種々の業を除く云々。五會讃に云く然るに念佛三昧は是眞の無上深妙の禪門なり乃至修し易く證し易し。眞に唯淨土の教門なりと云々

元照師は佛祖通載十九云錢唐靈芝寺律師元照字湛然餘杭唐氏の子。少くして祥符東藏惠鑑師に依て毗尼を学ぶ神悟議公に見るに及て天台の教觀を講ぜ博く群宗を究め律を以て本とす。又廣慈に從いて菩薩戒を授る。戒光發現して頓漸律義兼備せりと云へり。南山の一宗蔚然として大に振ふ常に布伽梨を披き錫を杖て鉢を持て食を市に乞と云々。佛祖統記廿八云元照は靈芝に住て律学を弘む。尤意を淨業に屬す。一日弟子を集めて觀經及び普賢行願品を誦す。加跏して化す。西湖の漁人ミな空中に音樂を聞と云々

屠沽の下類は牛羊の肉を割き魚を賣て屠り酒を造りて是を賣て沽ると云ふ。皆賤き者なり。故に下類と云

第二番に永辨問曰今此淨土宗は權實の二宗の中に權宗なり。漸頓二教の中に漸教なるべき哉。其故は此宗は眞如實相第一義空の理を明さず只散苦依淨指方立相の旨を宣ふ。而るに何ぞ此教を以て大乘至極の頓教と云ふ源空答て云。淨土宗は實教なり。是故に或は真宗といひ或は頓教と名け或は一乘と名つくるなり。但通途の權實は云ふ自力に約してこれを明す。弘願の一法に於ては偏に他力に就て之を論ず。されは實教とは云ども自力の實は異なり。頓教とは云ども聖道の頓は吳越に故に權に似て權實漸頓の似て實に似て漸に似て漸に非と頓に非と既に權實漸頓の所攝にあるべき知めとれ諸宗超過の法門なり。但し權實の所攝に非ずして強て真實の名を立つ。而て他力を眞實の躰と示て漸頓の所攝に非ず而も假に頓教の称を与へて。横超横截の用を顯す。是故に和尚の云く。我依菩薩藏頓教一乘海と云々。元照の云く故に云ふ。一切淨土の法門は皆これ

大乘圓頓の法なり。定て徧小なるべし。此等の所釋たれも依用せざるんや
永辨が繪詞傳云く。惠光坊永辨法印が證眞法印の立義の師なりと云云
第三に智海問曰く大乘眞實の理を明す。是實教と名く。是心是佛の
旨と有べし。豈に頓教と名づく。今此宗は生佛一如の道理を明すに徧
厭離穢土の安心なしと。寂滅無生の實義なり。而に僅に欣求淨
土の起行を說く。專ら權門漸教の法門に附傍す。全く圓實頓速の
宗義を立てざる事を他力に託して心此を
得ざる。況や權實の所摂に超過の義を論ずるや
源空答て云く。疑難の趣きは偏に自力修行の道理に約して漸頓
權實の差別を存ず。全く他力弘願の密意の教門なりと知らず悼べく
悲しべし。夫諸佛の法は眞如佛性を以て躰性とす。無相泥洹を以て
所期とすと此理を立て外に全く別の法なし。然に三世の諸佛の化導は

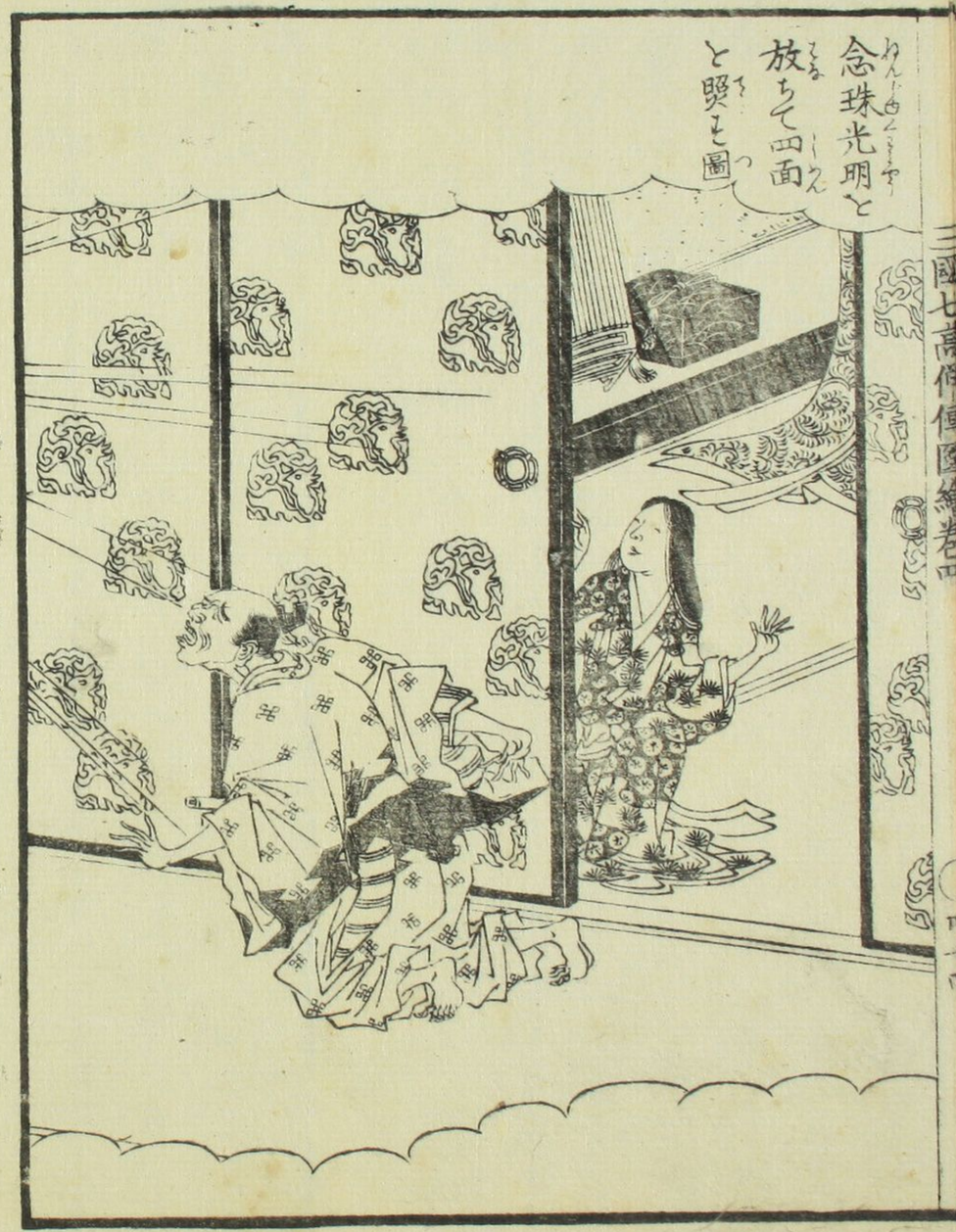
必ず聖道淨土の二門を設て二種の勝法ともに無相無念の一理に入しめんが
為也。所入の理は同じと雖も能入の門に自力他力の別あり。自力と者は
他力に勝れたりと。其聖道門とは是を以て二あり一には漸二には頓なり。頓
教とは所謂つまる所は方行は
ひて又二あり。所謂教内教外なり。漸教とは所謂つまる所は方行は
修して漸く佛果を感ず。修行の時なり。成佛の道遠し。故に漸と
名づくるなり。又名づけて權教とも。俱舍成實律宗法相宗等此意を出ざる
なり。頓教とは五乘もなく真如を以て還りて蠢々の心を約して十聖を
きはめて法性をさとる。元來不動と說く。證果を刹那に究竟し。悟道を
一念に圓滿す。故に頓教と名づく。又名けて實教と云。眞言佛心天台華
嚴等正しく此意なり。此等の漸頓の諸宗。其法門一途にして方機に
ど。或は漸或は頓。唯一機に被らしむ。若は權若は實。ともに一緣に摂と。故に
即ち施即ち奪して妙道遠く沾ぶ。故に釋に云く。漸頓則ち各所宜

なる〻縁に隨ふて皆解脫と蒙る。たかるふ衆生障重くして。悟をとることを明らめがたしと云々又云く或ハ人天二乘の法をとる。或ハ菩薩涅槃の因をとく。乃至根性利ることのハ皆益と蒙る。鈍根無智なるハ開悟しがたしと云

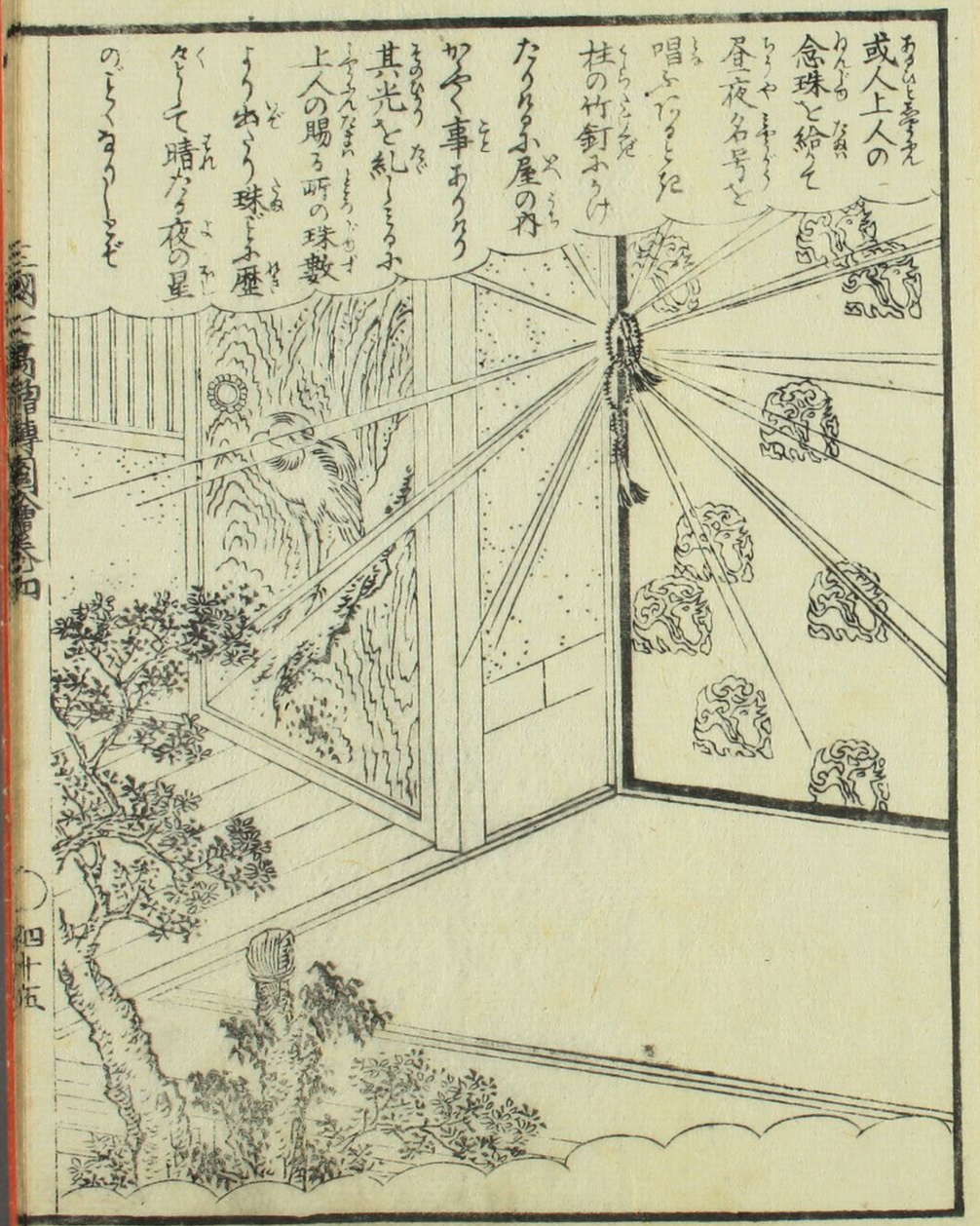
次ふ淨土門とハ是ふつて二義あり。一ふハ他力本願の實躰二ふ他力本願の化用なり。初他力本願の實躰とハ。所謂佛の密意なり亦此佛智所照なり。ふて聖道淨土の二門ハ共ふ眞如實相を以て其躰とすること故ふ前の聖道門の中ふ明を処の無塵法界凡聖齊圓の理。恒沙の功德寂用湛然の性なるゆ。是他力の實躰なり。五智の中の佛智とハ此理を指すなり。次ふ他力本願の化用とハ密意の上の教門をいふなり又是四智の所成なり。極樂遠うしてなを十方億刹の西ふをへ。弥陀已心ふ住して一座花臺の形を現ず。不思議智不可称智等ハ此善巧方便を指す。實ふかりんれ〻。眞如界の内ふハ生佛の假名を絶し。平等性の中ふハ自他の差別なし。眞如自ふ

あ〻ら他ふなりまして。ちを自他の性を包。かるゆえふ鎮ふ自他を熏習しく平等性の性海ふ會入せしむ。應ふ知べし自力他力とハ是則強弱の義なり。それ熏力弱きを以ハ冥熏密益ををくるもちを行人をして勵まされハ道果を得ず故ふ自力とハ熏力強きをハ諸佛外護の智識とをして增上縁をとるとこれ故ふ他力といふなり。強弱ありとハいへども。俱ふ眞如の力なり。ゆえふ眞如界の佛平等性の衆生の爲ふ。一心法界の理を開示せんと欲するの所垢障覆深の凡夫自力を以て。自己の淨躰を顯照しがたし故ふ。諸佛興極の慈悲衆生迷倒を哀愍して。法藏發心を示現し超世の弘願を発起し。易行易修の口称をもて頓悟頓入の往生を得すむ。他力の實躰とハ顯れ易く。弘願の化用忽ちふ成じ易し。曇鸞法師ハ安相爲物の二義ふ約して如実修行の相を釈せ此意なり。然ハ即因ハ少く果ハ多ひふ行ハ浅くして而も悟の深さとハ他力頓大の教ふ由なり。是を以てこれを言ふ頓の名ハ

念珠光明と
放ちて四面
と照と圖



或人上人の
念珠と給そ
昼夜名号を
唱ふ行るとき
柱の竹釘ふみ
たりるふ屋の内
かゝく事あるゝ
其光と紀しるふ
上人の賜る所の珠數
ゝ出さう珠とふ歴
々して晴なる夜の星
のごとくなりしとぞ



同じくとなを諸宗の頓ふおえん。實の名ハ同じくとも。餘教の實ふハ勝まう思を知めくさこの。凡他力の法門ふ於てハ諸宗の談ぜざる處。諸師の判せざる所なり善導和尚ひとり此宗義をもて我宗の祖師ぐ。めて此宗門を開くなり。凡聖道自力の法門ハ諸佛無極の慈悲とのべ盡さと無塵法界の上他力弘願の躰用とあらはすを有べくと。淨土の一宗いう斯の如き法門をあらさをちれば他力の大道へ。廣弘ひろて五乘ひとしく通入を圓々極々無相無念の果成の上ふ無方難思の大用と起を有相の修因ふ直ふ無相の樂果ふ入しめ往生の見と抑く。無生の理と躰達せしむと。何の教の中ふ斯の如き法門と明さや

智海ハ繪詞傳四十一ふ云く。檀那院の嫡流智海法印ハ毗沙門堂の法印明禪の師ふうと云々叡山ふ久しく住して。天台の碩學ふう第四番ふ叡山の東塔竹林坊靜嚴法印問て云く。眞言佛心天台華嚴ふ

直ふ眞如の淨躰とあらはす事と期を。是則上根利智の機のためふ儲けうる所の法門ぞう下根下智ハ垢障覆深ふて敢く此利と頭照さる事あたハ。是ゑ為ふ淨土の化義とまうけ口称の一行と授け。彼土ふ引入して後ふ見佛聞法の緣ふよりて無上法忍を悟ゝらてこゝらて眞如の理ふ入事と得やすし是とをつく之と謂ふ。聖道淨土ゑるく眞如の所期をうとをへども淨土門ハ猶これ迂廻の道ふう頓と名くとも。華嚴法華の頓ふハ及べうをいん。源空答て云此難大抵さ〻ふ會通せしるうう。根機ふ於く利鈍と論ぜうふ相望不定うう。聖道の一門ふつく是とうふ時ハ漸とハ鈍と名づけ頓とハ利と名づく聖道淨土相對ふ時ハ。惣して聖道門と利と名づけ淨土門と鈍と名づく是一往の義ふう如何とうれば修しがくして能修し悟と難くして。能悟ふう故ふ。聖道自力の人と利根と名ぢくる也淨土門ハ入安く行ず易し。故ふ難きと捨て易きとうの辺ハ。旦鈍根下機ふ同じ。

然れども。再往これを論ずるに。聖道浄土の二門をのゝ利鈍ありゝ中に先て浄土門の中。利根有智の人他力實躰の智と得。無塵法界の理の上にかゝく洹沙功德の化用を施し垢障覆深の凡夫を攝して浄躰頭照の悟を得せしめ。始て本願他力の大道に入る。頓に廓然大悟の無生を證を。全く聖道門の上智利根の人に劣るべきに。凡聖道門の諸教は。利鈍もに究竟し。與へて成ぜしめんと云は。隨縁一途の益をゆるすとも。奪て而も之を論ずるに方り中に一も是を得るし。故に道綽のいはく。仰ぐに大聖三車の招慰旦く。羊鹿の運也。權に自て未だ達せず。徑に大車を拳るも亦是一途なり。唯ゆくゝは現に即位に居して峻徑を長とし。浄土の眞門は極悪最下なりと以て捨てといふ況や上根をや本願の密意弘深なりて他力の教門頓速なり。利根なんを入ざらんや。智者なに是を思擇せざらんや。但し直入迂廻の辺に至ては。自力あつて是を云ふに誠に此に於て證入と期と。是直入なり。佛國に往生してさとりを

得ると迂廻に似たりと。横超断の辺に約せば。有相の念に於て無生の國に入る。遥に聖道の直入に超勝せり。如何ぞ自力直入は直如にあらず難く。法性に入ること唯是有教無人。有名無實なり。往生浄土の頓入は眞如法性と以て法藏の行回に入らしめ佛智の所照に譲らしむ。是と他力實躰弘願密意と名づくる也。此の證悟と以て頓に善悪利鈍の凡夫を開悟せしめんが為に發し給ふ所の超世の本願なり。故に諸宗の頓法に超て。此道理を顧べ。浄土の一教と以て。ぐして下根最劣の法とすべきなるべし

静嚴の繪詞傳三云く延暦寺東塔竹林房静嚴法印。吉水の禪房に至て。此度いふして生死を出離せんやと源空に尋申度侍れ。答ふ。法印云く決擇門に去るに。出離の道に於て。智德に至て道心深くまもれば定て案内の義さとりぬと申されば。源空は弥陀の本願に乗して。極楽往生を期する外に全く知ることなし。法印又曰く。愚意も美言と兼て愚案と堅

せん爲ふ尋申所なり。但し妄念競い起て侍るふハ如何。上人の云くられ煩悩の所爲なれば。凡夫の力ふ及べ〻す。唯本願を憑んで名号を唱ふまゝに佛願力ふ乗〻て往生と得ると。法印信心決定して。疑念なきまゝふ解往生更ふ疑ひなく退出し給ひぬゝ〻問ふ云。法印既ふ疑念なきまゝふ解を今何ど此問と發るや。答て曰。但し問の意と知りぬ〻

第五番ふ明遍僧都問て云く。禪宗ふハ教門教外と立て而と教外の一法と立て諸教の法門と取捨く。眞言ふハ顯密の二教と判じて。顯教と立て遮情門と〻秘密と立て表德の法と。乃至天台ふハ五時八教と立て超八醍醐の法と立て。三五七九の諸法の上ふ置く。此等の諸宗皆以て深奥なり。輙く其境ふ望ミ〻し。然るふ今教門と以て教外と下し顯教と立て密教ふと〻爾前と立て法華と嘲ると諸宗の人これを許をべ〻ど如何。源空答て曰。凡宗と立る法ハ各自宗の法と以て勝とし。他宗の法と以て劣とす。其義問端ふ及ぶこれなり。苟も疑執と懐くこと〻なれ此故ふ禪門ふハ教門と以て劣とす。教外と以て至極とすと〻ど。而し是ハ此一宗の執見なり。他宗ふ全く是と許とべ〻ど故ふ眞言ふハ秘密と以て最上乘の法と立る時禪宗の無心絶想の義なと是顯大遮情門ふ属と〻なり。自餘の諸宗これに准ど〻。今浄土宗の意ハ漸頓の諸教ふ眞如佛性と以て所期とすと〻ども自力の修行ハ解しがく入ると〻なり。故ふ者て上。念佛往生ハ施戒忍進と〻と修ぶべ禪定般若なも學ぶど觀法觀心なも用ゐど身印口誦なも假ど坐禪工夫なも依らど。唯他力口称の易行と立て直ふ極樂无爲の宝園ふ入。頓悟頓入の功德。なるふ諸宗の法門ふ超ると〻。此故ふ永觀の日實ふ知弥陀の名号ハ殆陀羅尼の德も過たり。又法華三昧の行も勝りなり唯佛名と称れバ直ふ道場ふ至る況や浄土往生せんと豈留難あらんと〻と第六番ふ貞慶問て云。他力の頓と〻往生以後の得悟自力の頓と〻現世ふ即ち

證入を聖道と云て勝れたり。浄土を以て劣とすべきなり。源空荅て云く
聖道門の人即身の證を期とすれども唯是自力にして他力の持なし
故に現世の證入は万が一もなし。縱いまだ證悟の人有といへども強く
無塵法界の一理なりと。ゆへに。他力洹沙の功德。無方無礙の化用を出さず
故に佛法の至極を知ざるなり。浄土の頓教には或は現世或は次世。根の利
鈍にしたがて。證入疑いなしとなり。猶これ勝れたりとすべし
貞慶は藤原尚書貞憲の子なり。母夢に高祖来て自稱して貞慶と云。
懷に入と見て即ち懷妊して成長して後羅深し書を母に奉る署に貞慶
と云。母夢想の名と同しかりけるとて奇とす。興福寺に投して出家せり。ひ
すの譽あり。最勝講の詔に應じ。もとより貧くして乘物奴僕を人にかる。會
衆に其破れ衣を匿に笑ふ講已て直に笠置の窟に入て坐す。解脫上人
と云。法相宗にして天台浄土を兼。碩德なり建暦三年二月二日卒す年五十九

第七番に證眞問云く此宗の習いに此土の入聖得果を許すべしとぞ現世の
證入とかや　源空荅て曰。此事誠にかなうと思ふべし。但一章提希夫人第
七觀のごとく於く。大悟無生を得ると。和尚これを釈して證得往生と云。これ
もとより最上利根の人。他力本願の利を信知して現世に往生を證得する
なり。往生にしたがて無上なり。此義かなわぬと思釈とぞ。　第八に顯
眞僧都問曰。和尚の意浄土の法門にもとづいて無相離念の義をもちゐず
何ぞ今無塵法界の理をもちゐる。名号の實躰とすといへり。源空荅て云く
有相は修因に約して無念は果證とさだめたり。諸師はこれを得ざる修因感
果ともに無相の義と存じて有相の願求を捨。故に是を破るなり。他力
の實躰と論じるなり。和尚の心無相離念の義をもちゐざるなり。故に釈に
云く無生實國はもとより常なりと云。又云く彼無生を見れば自然に悟と
云。又云く覺えば眞如の門に轉入と云。又云く法身常住して此

虛空の如くと云云。第九に湛叡問て曰く。天台宗の意は權教にも有教無人也圓教に非んば成佛の法うと云へり。淨土宗の意又念佛往生の外に出離解脫の法うといへるにあらん。源空荅て曰く。立宗の習ひ。廣く教相を判じて。衆機を納むるを終に一味の法に歸するが。小乘は猶所學の法に於て至極の想をうと。如何ぞいはんや大乘をや。故に諸宗には我所立を以て至極とし他の所修を以て方便とす。ましてや淨土宗は聖道淨土の二門を立る本意は。一往二門とのべて其益を許すと雖も再往これを取る時は聖道の益を奪て淨土の一法に歸する。此故に眞言止觀の妙行を證悟のうへは必ず淨土の果報を得。華嚴禪門の悟入も解脫を遂る日は自然に法王の家に至るべし。佛土に至ては必ず佛身を念ずべし。諸教にも念佛をうる淨土の中には極樂を最とす。諸佛の中には彌陀を本とす。彼佛願の淨佛國の主諸佛慈悲の躰なり往生と云は諸教諸宗の悟道の時の名なり。茲に知ぬ未だ悟らざるの前は暫く隨緣の執情に封されて自力の得道を期して淨土を願ずべしと。又得悟の後は必ず泥洹の樂邦に入て終に道場の妙土に歸する。三世の諸佛は念佛三昧に仍て正覺を成ずと。此意なり是を思べし。第十に俊乘房重源問て云く。一切往生の行人必ず生無生の道理を知て名号の躰用の義理を心得べし。淨土の行を修すべき哉。源空荅て云く。爾あるべし今他力の躰用を明すべし。淺深を論ずる時宗旨の原づる所を尋ねんが爲に是智者の知る所なり。一切の行人これを知べしとは非ず。例せば三心具足の行人かならず淨土に往生すと經釈もこのごとし下智愚鈍の族田夫野客の輩なんぞ三心の名義も暗しなんぞ弥陀の名号を稱ずるのみ必ず往生を得べしと信ずれば自然に三心を具足するが如し。名号の躰用の義を明すとも又以て是に準ずべし。造罪の凡夫具縛の底下一念十念の功力をもて。決定して来迎にあずかると信知すれば即ち是他力の

實躰と信じ。生無生の道理と心得るふ當るべし。如何ぞ凡夫の極樂はまれ無漏真實の勝相。泥洹無爲の樂邦へ煩惱具足の凡夫容易以て入ぶし難しふ而も他力本願の不思議ふ入て罪障の輕重とも論ぜず戒行の持犯とも言ず稱れば必ず生るべしと得ると信ずれば自然ふこれ當ふ名号の躰用と心得るふあるべし。他力と離れて是と云ば此義誠ふ成ずべからざるべし。他力ふて佛智の照覽ふ依て是と云故ふ名号と信ずれば則ち躰用と信ずる義なり。第十一ふ願眞問て云く他力往生の義猶ふて明らかなれば罪悪の凡夫佛の願力ふ託して無漏窟閣ふ生ぜば。他作自受の義ふあるべし。因果の道理ふ叶ぶべきや。源空答て云。凡眞如法性の理は自ふ非ず他ふあるべし。修因ふて感果もあるべし。無因果の中ふ強く因果と論ずるの時既ふ自の修因ふよって感果をいえば。何ぞ又他の縁ふよって感報せざらん。彼縁覚の聖人。飛花落葉の因果と待て。煩惱と斷じ

道果と證と。艸木無心なれと猶修道の縁となる。況や弥陀誓願と發し給へる。往生の便なるべきなり。但し聖道門の意は行者の自行猛利なる時は。他佛加被と雖ども故ふ。自力は自力にて他力は弱し。故ふ口にて自力ふて他力の持なりと云。淨土門の意は三心と發し名号と稱て造悪とも止ぶ。妄念とも息れば。行者の自力は全て弱し。然ふ佛願力つよくして悪業も障られず。妄念も深れば。名号と稱て必ず往生と得ると云。本願名号の力は強く。行者の自心の功力は弱きなり。故ふ他力往生なるべし。是又因縁異報の義ふ成べし。一向の他作自受もあず。強弱の義と絡て。自力他力と分別なるべし。第十二ふ永辨法印問云く。罪業妄念は仏他ふ專ら称念すれば必ず往生と許さん人ふか悪見ふ住して悪業と恐まず好ず衆罪と作て。妄念とおそれば返て悪趣ふ墮とぶべきなり。なるべきは一往先悪と制し。妄と止ると以て安心の面として。麁強の罪とおそれしびるんや如何

源空答て云く諸悪莫作諸善奉行は諸佛の通戒なり。なるほど造悪の凡夫も念佛して往生をとる義は。全くこれ悪業を造て妄念を起せと云ふにあらず。今悪趣の苦果をなれ。浄土の快楽をねがふ者は専ら三業の罪を制断して三業の善を奉行すべしと。此道理を知らんにも愚痴の凡夫なれば更に妄念悪業を制止しがたし。此事数々も多く余あり。おもへば〳〵此如弥陀の本願は斯の如きの凡愚を救んが為なり。易行易修の名号を以て犯罪の谷を塞ぎ給へり。此意を得るの徒。なんぞ事を他力本願に寄せて。好て大悪を造べけんや。縱又煩悩強盛なりとて。婬酒肉辛を禁ぜず。貪愛瞋憎をやらざるべきや。好ぐ悪を造るは仏教にあらず。唯是本性乃至所心本願を頼ひぬるて。今更の是を止めて許さるは非也。もれば麁強の罪をおいて聖道浄土も後世を恐るの人なんを是を禁ぜんは細隙の罪をおいて聖道浄土をひ。誰これを制止せん。おもへば造

悪をおそれ軽次重の三品あり五逆は重罪なり。是を造るものまれなり。在家の十悪の中は殺盗の二罪は堅くこれを禁ずると有るべし。自余の諸罪は盛んなるを犯を。出家の罪は於ては。持戒の人あれは破戒あり。戒法を持つ人なんぞ何かなるを毀犯をるとあん。無戒の僧尼は在家と差別なり。縱いるは婬酒肉辛を禁ずと。唯是一旦の制禁なり。妄念を止るべし。然は虚受信施不浄説法等の自余の衆罪稱て討ぬるべし禁る所の罪は一両なり。犯を所の悪は數塵沙に過なり。斯のごとの造罪の徒。自力を以て爭て解脱を得べけんや。此故に他力本願の滅罪増上縁の功用を頼て念々の称名を以て隨犯隨懺をべし。但し悪見を禁ずと。妄心の面をなすべしとなり。なるとて犯罪のりの解脱を得ずとて。是聖道門の安心なり。悪業を造るとも名号を称ばは往生を得ずとて。是浄土門の安心なり。此もの

聖道と捨て浄土に飯き濫觴は罪障と制しがたき故なり。若夫罪業を制伏
し妄念を息めんは戒定恵の三学ゆゑの法。これを修行せざる故に知ぬ
此見を成むる人は永く他力本願を信ずべきなり者なり。努々是を思
べし。浄土宗の義理。念佛の功力弥陀本願の旨を説くなりと明々たり。
さる程に言口に定り本性房を。黙然として信伏し早ぬ顕真僧都は双眼
より紅涙をながし。集會の人々も悉く歓喜の涙を流し偏に飯伏渇仰す
源空重て曰く。予道世の當初より。衰老の中頃に至るまで。竊に一代の教文を
披いて借出離の要義を案ずるに。顕に付け密に付け開悟容易なるべし。事
とゝひ理ゝひ修行成就しがたし。一實圓融の窓の内は。多年即是の妙觀に
ほこれ。三密同躰の床の上には今に現世の證入と矣に。然に間涯分を量
て浄土を願ひ。他力を憑ぐ名号を称ふ。誠に往生極楽の教行は直至
道場の目足なり。有智無智誰の人か飯ぜざらんや。而に諸宗の行人おのく

らく。口称の念佛は偏に愚鈍の機に被らしむ。全く眞言止觀の妙行に及ぶ。
更に華厳禅門の宗旨に勝れたり。一文不通の頑魯に於ては自ら往生の一路と
修すべきと。利智精進の根氣に至ては唯現世の證入と期すべし。或云
念佛往生は易きに似て易からず。如何ぞ云れば。十悪五逆と造るとゝろを。
深く改悔の心を発して。後に重ねて之を犯さざるゆへに往生を遂る也罪
業を制止せざんは終名号を稱ふとも。往生をぐるし。又一念十念の往
生は妄念異念を休息して。一心不乱に之を行ぜば。余念相交て妄心雑起せて。
行業成ぜざる故に知ぬ念佛三昧は若は持戒清浄。道心堅固の人若は智慧
深遠勇猛精進の徒。罪障を制伏し。余念を休息して是を修し之を行ぜば
とゝ或は勝の儀を許せども易の義を許さず。あるひは易の義をゆるすとも
勝の義を許さず。悲しいかな斯のごとの輩。説に其一を知つて未だ其二を
知らず。伏惟は真宗の法門は稍古今に異なり文の大旨を知らざる乃人宗

熊谷蓮生房大原
五禪寺ふ至つて問
答の勝劣を窺ふ

蓮生法師い大原の
問答ふ律川の邊ふ
やとりして勝負の
善悪ふよつて許多の
衆徒とも取ふしぐ
るを紀勢ひを堅唯
なのんで窺ひしい
道世の身といども
生質勇猛の
武士なり

蓮生

時ふして奮
撃の強氣
と發ふる
まの
さま

の元由と辨つるの輩妄てふ弘願他力の淨業と輕むりて空く聖道自
力の修行ふ疲る。極樂ハ是泥洹無爲の界。諸佛法王の家なり縱ひ利根之
人なりと雖も而と往生と願ふべし。況や鈍根之人や縱ひ上智之人なりと雖も而も他力と憑
るべし。況や下智之人や十方佛土の中ふ唯往生の法のみ有て二もなく三もなし。
佛の隨緣の說と除く乞願くハ。畢竟見の輩別解別行の人なり邪雜
の執とわるなて專修の門ふ入へし。弘願の一称ハ方行の宗致なり誰か是と行セ
さん果號の三字ハ衆德の根元なり。敢て之と朝るとなれ人として仰慕セしるの
教門ハ暫く淺近ふ似れども。自然ふ悟道の密意と究て是深奥なり。一念
ふ佛意ふ契らんと欲るとれハ。極樂と願ふべし。一世ふ行業と成んと欲セば
弥陁と念ずべし。於戲釋尊出世して衆生と濟度したまふ化道百億ふ
遍く利益三千ふ普し。化緣の薪盡て正像くやく過ぐ。我等生と五濁六惡
の末法ふ受て罪と四生十惡の業道ふ感と。善根薄少なり。根性遲鈍なり

戒行持ふかたく定惠證し難し。妄てふ其分と在世の正機ふ比して。現世の證入を
期すべきと。暗く此身と正像の賢聖ふ同ふして自力の得道と恃べきに況や
在世の頓悟頓入ハ多くハ是權化の示現。正像の得道得果ハ。恐らくハ實業の
衆生ふ。末代の機根ふ準望するふ。足らず。當今の凡愚ふ比校するふ及ぶべき者
然らふ弥陁の名号ふ於てハ。極善最上の法なり。造惡の凡夫なりと雖も之と修
すれば往生すると得る。他力難思の行なり。具縛底下なりと雖も之と信れば
來迎ふ預る。此則ち念佛ふ於て勝易の二義なり。勝の義なりハ謂く至極大
樂の意ハ體の外ふ名く。名の外ふ體なし。万善の妙躰ハ名号の六字ふ即し。洹
沙の功德ハ口称の一行ふ備ふ。大願強力の構出なり所万德と行者ふ讓與セ。他
力難思の巧方便なり。一称と衆善ふ超過セり。知識廣讚もれば猛火涼風と
なる。善友教て称ふべ。金蓮果日の如し。大利の名号ハ無上の功德なり易の義と云ハ
行住坐臥と論ずべ。是と修とれば來迎ふ預る。時處諸緣と謂ど是と唱ずべ

往生と遂く是則ち身心の濁乱ゆゑ。唯他力の引接ゆ依る故に凡聖道自力の修行ハ罪悪と制止ず。妄念を休息せざんハ。其行成就ゑ難し。生死罪濁の心泥。萬行水精の珠と穢るの義譬て知るべし。此則ち珠の力用弱きゆ故ゆ水清ゑ水濁ぎれハ光色顕れざるゆ。本願名号の躰ハ凡夫相續忘念の衆生ゑれも隨犯隨懺すれハ衆罪と消除し唯願唯行ゑれハ淨刹ゆ往生と。此則ち弥陀如来の至極無上の淨摩尼珠ハ凡夫罪濁の心水ゆ穢されと。珠の他力強みゑて無量生死の泥濁頭ゆ無漏法性の清水ゑるゆ。譬ゑて思ふ者。凡癈悪修善ハ佛教の正意なれども。魔ゑれも。癈られざるゑ何んぞん。息忘修心ハ行道の大途ゑれども。息ゑれも。息ゑれも息られざるゑ何ぞん唯ゑ〳〵ら弥陀の本願と憑ひ〳〵ら。須く他力の名号と唱ふべし。此則ち造悪の上の癈悪の法ゑゆ。妄念の中の息忘の行ゆ。佛法修行の中ゆ是ゑ易きハ有べからざる而已と。他力本願の名号濁世末代機教相応ゑ

出離ゑ〳〵ら聞かんと。之ゑ読たまふゆ聽入ゑる三百余人。一人と疑の心ゆ。人々虚空ゆ充ちるゆ如く。言語と出ゑ人ゑ。碩徳の僧侶讃ゑて云。形とれハ源空上人。實と応ゑ〳〵應悉の弥陀如来と疑ゑる。顕真僧都ハ蓮波志のひらく一心丹誠と抽んでく自ら香爐と持佛堂と旋遶し。行導ゑて高聲ゆ念佛と唱ふ。南北の明西を。西土のゑ〳〵ゆ飯し。信男信女参禮し。聽衆の老若の諸人心中の誠と疑し。各異口同音ゆ三日三夜の間高聲ゆ不断念佛と修ゑる其ゑ紀山谷ゆ満。林樹と動ゑと。故ゆ信と發し。縁と結ぶ人多ゑ。顕真僧都ハ餘行と置て向専修の行者と。ゑ〳〵ゆ。自ら此出離ひ〳〵ゆ。念佛往生と期ゑ〳〵ゆ。ゑ非ず他人と。ゑ〳〵ゆ。去ゑぶゆ妹の尼公と勧ゑん爲ゑ。念佛勧進の消息と遣ゑる。世間ゆ流布ゑて顕真の消息と名ぐく略之文章奥の宛書ゆ文治二年十二月廿九日護摩堂尼御前〳〵ゑ。顕真専修の身と。念佛と行ゑ〳〵ゑ。此消息ゆ明ゑ。又十二人の衆と定ゑ。文治三年正月十五日ゑ勝林院ゆ不断念佛と

始め行れしふ。顕眞十二人の隨一にて。戒の刺とを勸めたまひける間の夜に十二人皆參し行道して同音の念佛を修もるふ。毘沙門天王列ふ立ゆいるると。顕眞眼前ふ拜みひしとこと又一の大願を立く此寺ふ九房を建立し。一向称名を相續して。余行と交つ〻勸りんと。共願空しかりしと終ふ文治三年十月ふ成就しけり。

他上の阿闍梨皇慶の旧跡。護法守護の霊地ふ五房と建。楞厳院安樂の谷とふて新安樂と号け。性智房境智房佛智房勝智房妙智房と号る又慈敬上人と願を発して。来迎院松林院ふまして。不断念佛とすゞ〻なるふ尤此時まで。源空上人の勸化いまゞ半ばしふ既ふ大原の問答ふ勝たまひしゝゞ。日本一州飯依まちゝ繁昌し。有難ゝ事どもなり

大原ハ京師の北山ふて。敵山の乾ふあるり。八瀬の里北一里ふあり若狭往返の街道ふて。東西ゝて八箇村あり 端ヵ寺村 上野村 大長瀬村 来迎院村 勝林院村 井出村 草生村 野村等之此ふ山門の別院九四十八院ありて。五禪寺ハ勝林院の内ふあるゝと来迎院松林院ハ

此別院の名なりと云。今大原ふ魚山勝林寺とふ古刹あり。是宗論ありし舊趾ふて本尊と證據の阿弥陀と称と座像ふて長七尺。佛の祖庸成の作なり。寺記ふいゝ〻當院ハ一条太大臣雅信公の息少將入道寂源法師の草創なり。往昔敵山の僧都。卒覚超同静慮院の偏救とていゝし智者のひしふ如来相好と隠し偏救ハ空の義と立なりふ。ひゝて相好と顕しぬるる。然れハ中道實相と如来の本意うんとて此ふ於て顕まぬ夫れ世人証據の弥陀と称しるる又文治二年の秋法然上人と山門の僧徒顕眞法印と始諸宗の碩学と一向専修の問答侍しふ法然上人の詰論あるに本尊光明と放ちなりと天原問答しゝ諸宗の知識ゝる上人の弘法ふ伏し顕眞も忽ち専修の行者しるり則ち法泉房ふ住めひ称名念佛絶をしと又寺門の傍ふ熊谷腰掛石 律川の橋の詰ふある蓮生法師此所ふ腰掛と云傳 鉋捨藪 呂川の傍ふ大原

問答の終に蓮生房鉦を袖ふかくかくして法然上人の供養に蓮生云く師も〳〵對論ふ月なふ〳〵あ〳〵ぶ。法敵と打とるべきの用意なりと。上人これを聞めして大ふ制し給ふ。〳〵ふ捨しと云傳ふ

等の古跡あり

時ふ俊乘房重源一の意樂と起して云〳〵此國の道俗男女閻魔王宮ふ至て。跪く交名を荅る時。佛名を唱へんが爲ふ。阿弥陀佛の名を付ゐ〳〵とく。先吾名を南無阿弥陀佛と。是我朝ふおいて阿弥陀佛の名を付ハ此時より始まりぬ

今何阿弥と片〳〵の略語なり阿弥陀佛の

三國七高僧傳圖會本朝巻本終

明治十二年
卯一月新調

長岡殿町
柳本角衛